



家庭教育修身叢談

特 71
948

301491-001-6

特71-948

家庭教育修身叢談

石井 了一

石井 福太郎 / 編

M27.3

BEI-0001



特71
948



勅語

朕惟フニ我カ皇祖皇宗國ヲ肇ムルコト宏遠ニ德ヲ樹ツルコト
 我カ臣民克ク忠ニ克ク孝ニ億兆心ヲ一ニシテ世々厥ノ美ヲ濟セルハ此
 我カ國體ノ精華ニシテ教育ノ淵源亦實ニ此ニ存ス爾臣民父母ニ孝ニ
 兄弟ニ友ニ夫婦相和シ朋友相信シ恭儉己レヲ持シ博愛衆ニ及ホシ學ヲ
 修メ業ヲ習ヒ以テ智能ヲ啓發シ德器ヲ成就シ進テ公益ヲ廣メ世務ヲ開
 皇運ヲ扶翼スヘシ是ノ如キハ獨リ朕カ忠良ノ臣民タルノミナラス
 又以テ爾祖先ノ遺風ヲ顯彰スルニ足ラン
 斯ノ道ハ實ニ我カ皇祖皇宗ノ遺訓ニシテ子孫臣民ノ俱ニ遵守スヘキ所
 古今ニ通シテ謬ラス之ヲ中外ニ施シテ悖ラス朕爾臣民ト俱ニ拳々
 服膺シテ咸其德チ一ニセンコトヲ庶幾フ



明治二十三年十月三十日

御名 御璽

家庭教育 修身叢談目次

- 第一章 貝原益軒の話、
第二章 醫師と胃弱病者の話、
第三章 秦の李斯の話、
第四章 小野道風の話、
第五章 フロイベルの話、
第六章 閣龍の米國を發見せし話、
第七章 アヘルニージとスマイルスの話、
第八章 渡邊ますの話、
第九章 教育大家ペスタロヂー氏の名言、
第十章 英國の畫工ゼームス、トルニルの召使某の話、
第十一章 英國のニウトスの話、
第十二章 サウオールター、ラレーの話、
第十三章 或人と童子との話、
第十四章 兵卒の折劍を叱せし話、
第十五章 和蘭國の少年の話、
第十六章 倉持傳五郎の話、
第十七章 田中平八の話、
第十八章 杉山和一の話、
第十九章 唐の張公藝の話、
第二十章 周公と王莽の話、
第二十一章 名和長年の話、
第二十二章 岩崎忠藏の話、
第二十三章 支那東漢の張湛の話、
第二十四章 春澄善繩の話、
第二十五章 寺澤廣高の話、

特71
94

家庭教育 修身叢談

第一章

題目 身體の健全を計るは、自己に對する務めの第一なり、
例話 具原益軒の話

目的

養生を怠る時は強壯に見ゆる人と雖も、疾病に罹ることを往々見る所なり、之に反して虚弱の人と雖も、能く養生の法を守る時は、長壽を保ち美名を揚ぐるを得へければ、唯學問を勉むるのみならず、身體を養ふことに注意すべしと諭す、

人の最大幸福は如何なるものなりや、と問ふものあらば、必ず身體の健全に在りと答ふるならん、如何に學術技藝人に長ずるも、如何に智慮才識人より秀でたるも、身體不健康なれば、何を爲し得らるべきぞ、例令ば地行の悪しき地に、大家を建築するが如し、其家いかで永きを保持し得んや、唯其顛覆を待

石井 了一
石井福太郎 編纂

- 第二十六章 松下禪尼の話、
- 第二十七章 鼠の會議の話、
- 第二十八章 劉元城の語を謹みし話、
- 第二十九章 井伊掃部頭直孝と永井信濃守尙政の話、
- 第三十章 ワシントンとペーチの話、
- 第三十一章 郭子儀と王曾の話、
- 第三十二章 宋太祖の話、
- 第三十三章 綾部道弘の話、
- 第三十四章 野々村彦左衛門の話、
- 第三十五章 今井善四郎の話、
- 第三十六章 英國音樂師の幼兒パーレーの話、
- 第三十七章 木葉長平治家内の話、
- 第三十八章 岩佐岩吉兄弟の話、

- 第三十九章 農夫長右衛門の話、
 - 第四十章 宋の神顔と候無可の話、
 - 第四十一章 唐の狄仁傑の話、
 - 第四十二章 佛國の少女マリーの話、
 - 第四十三章 矢野毅卿の話、
 - 第四十四章 岡商會の老母と永倉某の話、
 - 第四十五章 米國の農夫と土人との話、
 - 第四十六章 秦の穆公の話、
 - 第四十七章 水谷亥孝太の話、
 - 第四十八章 普王フレデリックと兵士の話、
 - 第四十九章 和田與右衛門の話、
 - 第五十章 高島嘉右衛門氏の話、
- 目次終

つのみなり、

大儒貝原益軒先生は、筑前福岡の人なり、幼時身體虛弱にして、常に病魔に侵されしが、長ずるに及びて、養生の道に心付き、起臥飲食に意を用ゐて怠りなかりしかば、次第に身體の健康を來し、遂に學業を以て名を海内に擧げ、八十の高齡を以て世を去るに到りしといふ、蓋し益軒の長壽を保ち世益をなせしは、只一の養生を務めしのみなれば、少年子弟は最も身體の健康に注意し、以て後來名を擧げ家を興さんことを務むべきなり、

(問詞) (一) 益軒先生は、幼時如何なりしや、

(二) 虚弱の身體を以て、能く學術を務むることを得たる所以は如何、

(三) 益軒先生は、養生の効により何事を成せしや、

(四) 養生を怠る時は何故に世を益し名を擧ぐることを得ざるや、

(五) 人の最大幸福は、何物なりと思ふや、其理由は如何、

(六) 諸子は身體健全なりや、

(七) 身體健全なる人は、養生の法を守らざるも可なりや、

第二章

題目 逸居飽食は病の母なり、

例話 醫師と胃弱病者の話、

目的

消食器は、身體を勞動するに依て健全たるものなれば、適度の勞動を執り、以て身體の健全を祈れと諭す、

或る湯治場に、一人の醫師あり、胃病を療治するを以て妙を得たり、さりどて此醫師、格段なる珍貴の藥を用ゆるにもあらず、又奇妙不思議の療治法を施すにもあらず、病者ありて診斷を乞ふものあれば、飲食を節し適度の運動をなさしむるのみ、一日肥滿せる壯年の人來りて、身軀の苦惱を訴へ、治療を乞ひければ、醫師は直に診察し、熟々其容軀を見て、心に思ふ様、此病者は世に珍からぬ、例の富豪家にして、平生家を出づれば馬車に乗り、四肢を動かすことな

く、勝手氣隨に飲食を貪り、奢侈懶惰に増長せし者なかと悟りて、頓て病者に
向ひ、足下の病氣は引受け申さん、心安く思はるべし、決して難症にも見へざ
れば、緩々治療さるべし、先づ今日は吾と共に郊外に散歩さるべし」と、相共に
馬車に乗り、醫師は自ら手綱を執り、市街を離る、凡そ四五里も行きたるとき、
醫師誤りて鞭を落したれば、車を停め病者に向へ、足下車を下り、彼の鞭を拾
ひ來るべし」と頼みければ、病者は何心なく、鞭を拾ひ取らんとする時、醫師は
馬の頭を向け直し、元來りし道へ引返し、一散に馬を走らせ、笑ひつゝ、病者を
見て曰く、足下は後より徒歩して歸り給へ、晝の食事も旨かるべし」と言ひ捨
て、馬を馳せて我家へ歸りたり、然るに病者は、暫時野外に茫然としてありし
が、馬車人力車の備ふ可きものもなかりしかば、止むを得ず徒歩して家に歸
りたり、然るに此日より食氣俄に進み、次第に精神爽快を感じ、幾日を経ずし
て、身軀の健康常に復したりといふ、世人大に誤りて、奇味珍膳を以て養生と
なすと雖も、適度の運動をなして、消食器に其滋養物を消化するの力を與へ

ざれば、如何に養分に富む食物と雖も、少しも身軀の健康を助くる者にあら
ざれば、適度の運動こそ、反て身軀の滋養といふべけれ、

(問詞) (一) 胃病の治療に妙を得たる醫師は、病者を如何にせしや、

(二) 肥滿せる人の治療を乞ひし時、醫師は如何にせしや、

(三) 何故に醫師は病者を置去りにせしや、

(四) 病者は如何にせしや、

(五) 何故に病者は、其時より全癒に赴きしや、

(六) 人は逸居して美味美食をなして養生になるや、

(七) 然らば如何せば身軀の健全を保つことを得るや、

第三章

題目 心は小ならんことを欲し、志は大ならんことを欲す、

例話 秦の李斯の話、

目的

心を把持する異々として小なるべし、決して驕泰なるべからず、之に反して、志を立つるに
數遠大高尙なるべし、決して卑近なるべからず、然らざれば已れ其才あるも大成に至るこ
と能はずと論す。

昔支那秦の世の李斯といへる人、或時厠へ行きしに、一匹の鼠ありて、身動き
する毎に逃げ隠れて、糞を喰ひたり、其後米廩へ行きしに、鼠の俵に掛りて米
を喰ひ居りしが、逐へども逃げず、いと落付きたる面色にて居たりけり、此時
李斯思ふ様、先きの鼠は、人の汚穢とする糞を喰ふにも、逃げ隠れ、又此鼠は、人
の命を繋ぐ貴重なる米を喰ふにも、如何に逐へども逃げやらず、人も亦此く
の如し、其居る所に依るのみと、是に於て大志を發し、荀卿を師として學び、後
遂に秦國の右丞相とまで進みたり、
學を修め事を行ふには、小を慎み微を苟もせず、序次を履みて進み行かざる
べからず、然れども我志す所の目的を達せんには、其標準は遠大高尙ならざ
るべからず、諺にも「棒は必願ふて針は必叶ふ」といへり、又大和俗訓にも「志を
立つることは大にして高くすべし、小にして卑くければ、小成に安んじて成
就し難し」と思はざるべからず。

(問詞) (一) 李斯は厠に行きて何を見しや、

(二) 其後米廩にて何を見しや、

(三) 此時李斯は如何に感せしや、

(四) 後李斯は如何なるものとなりしや、

(五) 此鼠を人に譬ふれば如何、

(六) 諺に何とあるや、

(七) 大和俗訓には如何、

(八) 心と志との區別如何、

(九) 何故に心は小ならんことを要するや、

第四章

題目 人一能之、己百之、人十能之、己千之^{ニス}

例話 小野道風の話

目的

一事一業を遂げんには、千辛万苦に打勝つ精神を以て、其事に當らざるべからず、若し止むなくば、事と共に倒るゝの覺悟を要す。論す。

人に勝れて功を成さんと欲せば、人に勝れて勞苦せざるべからず、昔小野道風は、筆道に心を寄せ、刻苦勉勵せしかども、其成果を見ざれば、中途にして氣撓み心屈して、殆んど其道を廢せんとしたりしが、偶々庭内に出て、池邊を散步せしに、蛙の柳枝に上らんとして、再三再四跳り上りたるも、容易に上り得ず之を見居りたる道風も、今は倦みたるに、蛙は尙も屈せず、跳りて止まず、遂に上ることを得たり、道風之を見終り、大に感激し、是より志を勵まし、一層筆道に心を込めしかば、遂に其道の奥妙を極め、日本の三筆と稱せらるゝに至れり、

人何等の事を成さんにも、志を堅固にし中途の苦を忍びて、以て其成果を望まんと肝要なり、

(問詞) (一) 道風は何に心を寄せしや、

(二) 筆道の困難によりて、如何せんとせしや、

(三) 道風は何によりて、再度心を勵ませしや、

(四) 道風は後如何なる筆者となりしや、

(五) 道風若し始めの困難によりて、斷念せば如何、

(六) 然らば一旦己の志したる事を遂げんには、如何せばよきや、

第五章

題目 職業を撰んで、専心之れに従事すべし、

例話 フロイベルの話、

目的

世には必ず流行の職業ありて、其時々によりて變遷あるも、一時は誰れも彼も其方向に趨りて、夢中なる者なり、然れども其人の性質に適せざるときは、如何に熱心なりとも成就し難し、故に流行に趨らずして、其身に適したる業に就くべしと論す。

人の務むべき職業は甚多しと雖も、人に能あり不能あり、故に其職業に従事する、先づ己の性質に適したる業を撰ばんことを要す、既に撰びて之れに従事せば、日々怠ることなく、忍耐勉強、艱難に克ち、中途にして其目的を變ずることなく、他日全成の効を期して待つべきなり、

フロイベルは獨逸に生れ、其父は僧侶にして、當時其職務に繁忙なりしかば、子を教育するに充分なること能はず、故にフロイベルは他の子弟よりも後れて村校に入り、其後叔父の許に在りて學問せしが、成長するに及び、遂に大學に入り、卒業の後種々の業に従事するも、皆好結果を得ず、一日某所の師範學校に行き、教頭に面會せしに、教頭氏を見て曰く「君速に建築家を止めよ、之れ氏の才に適せず、宜しく教育者となるべし」と、懇々勧めしかば、氏茲に初めて其言に従ひ、教育に心を傾け、遂に教師となり、日々怠ることなく、能く生徒を薫陶しつゝ、在りしが、思らく「人の幼時こそ生涯の苦樂を分つの時期なれ」と、遂に幼稚園なるものを創立し、自ら稚童を集めて保育しけるに、其結果最も好良なりしかば、頗る名聲を博し、後世氏を推して世界三大教育家の一人とするに至れり、嗚呼氏の如きは、實に其身に適し、其才能に應じたる職業を撰みたる者といふべし、

(問詞) (一) フロイベル氏は、何を以て世界に有名なりや、

- (二) フロイベル氏は、初め何業に従事せしや、
- (三) 若しフロイベル氏にして、建築家を以て終れば、如何なるべきや、
- (四) 何故に建築家にて有名ならざりしや、
- (五) 然らば諸子は職に就く前如何にするや、

第六章

題目 智者、不惑、勇者、不懼、

例話 閣龍の米國を發見せし話、

目的

智者は自ら信ずること確乎たる故に、區々の衆説に惑はず、勇者は其事を實行するに及んで、死をも懼れずして勇往す、もし智ありと雖も、勇なければ、席上の水練たるを免れず、勇ありと雖も、智なければ、奇功を奏すること能はず、故に事を謀る者は、智勇を兼備せんことを要すと論ず、

古昔以太利國に、閣龍といへる人あり、幼時より堅忍不拔の精神を以て、銳意熱心航海の業に従事し、屢諸國に渡航し、實地の經驗より、地球の圓體なることを考按し、遂に米國發見の大業を企圖するに到れり、然れども氏は元來貧

困の一水夫なるを以て、一船をだに熾すること能はざれば、此上は只有志者に向て賛成を請ふの外なしとて、先づ故郷に歸り、國王に謁し、其企圖を述べ、るも信せられず、其後各所を彷徨し、王侯貴人に其宿志を説く、皆閣龍を以て狂人となし、之を賛成するものなし、最後に西班牙國に到り、國王に説く、是亦寒水夫何をかいふ、とて信せられず、且つ同國は當時財政困難なるを以て遂に斥けらる、然れども閣龍の宿志百折撓まず、尙地圖製作に思を凝らし、時節を待ち居ること三年、更に女王に乞ひしに、其志望の確實にして大なるを嘉賞し、氏の爲めに二艘の船及び食料を與へたり、是に於て氏の宿志其端緒を得たり、其喜悅想ひ知るべし、是より出帆の用意をなし、水夫を募集せしも、皆遠航の難きを危ふみ、應ずるものなく、辛ふじて凡十人を得たり、氏は水夫等を奮發せしめん爲め、快辨を以て此の企圖の確實なる理由を告げ、以て彼等に意外の想像を起さしめ、愈、西に向て解纜せり、航海中或は暴風に逢ひ航路を失し、或は暗礁に衝突して船體を損し、數多の艱難を嘗め、次第に進行する

も、唯茫茫たる蒼海の外、一も見ゆる者なく、寂寞として地獄に入るも斯くやあらん、どの思ひありければ、水夫等皆歸航を欲し、之を氏に説くも、其精神確乎として動かす可らざるを知り、密に謀を廻らし、氏を海中に投じて歸國せんとせり、氏早く之を察し、水夫等に約するに、今日より三日の内に陸地を見ずば汝等の言に従ふべしと、益、勇氣を振興して進行するに、異草奇木漂流し、小鳥船邊に集りければ、氏は竊に陸地の近きを知り、喜ぶこと斜ならず、果せるかな、第三日の夜二時頃に到り、前方の第一船より、陸ヨ、と叫ぶ聲聞えしかば、滿船呐喊して祝聲を揚げたり、既にして曉に至れば、陸地前面に現はれ、樹木蒼々として繁茂し、美花其間に點綴し、海岸に裸體の人さへ見受けたり、因て直ちに上陸し、諸所を巡檢し、珍禽異木を携へ國に歸り、國王に復命し、以て其宿望を遂げ、永く西國の領地となさしめたり、朱子曰く、精神一到何事か成らざらん、と、實に我を欺かざるなり、

(問詞) 一閣龍は何處の人なりや、

- (二) 其性質如何、
- (三) 閣龍は初め何業をなせしや、
- (四) 實地の經驗により、何事を考へ出せしや、
- (五) 夫れより如何せしや、
- (六) 以太利王は如何せしや、
- (七) 其後各國を彷徨せし時、諸人は閣龍を何と思ひしや、
- (八) 西國王に説きし時如何せしや、
- (九) 其後如何せしや、
- (十) 閣龍は誰れに船と食料とを與へられしや、
- (十一) 其航海中の閱歷如何、
- (十二) 何故に水夫等は閣龍を水中に投せんとせしや、
- (十三) 閣龍は如何にして水夫を鎮めしや、
- (十四) 閣龍は如何なる徳を備へたるか、

第七章

題目 讀書は精熟するを貴び、多きを食る勿れ、

例話 アベルニコロフとスマイルスの話、

目的

讀書の要とする處は多讀して標題學者となるにあらずして書中の意義を玩味熟讀し自家の所有となすにありと論ず、

アベルニコロフ氏の説に「吾が心に他物を容受するの分量あるも、若し其定まりたる分量より多く物を容るゝ時は、必ず外の物を推し出す」と又曰く「人何にても、之を爲さんと願望する其意思明白なれば、必ず之を成就する所以の方法を見出すべし」と此説に付英國のスマイルス氏敷衍して曰く「一科の學を徹底通曉して自家の物となす時は、何れの時にても、用ゐんと思ふ儘に用ゐらるべし、之を例へば人若し自家に金銀を如何程多く貯ふとも、他出の際、囊中に一錢の所持なければ、決して當坐の用に應ずべからず、故に學問の通金を平素其身に蓄ひ置けば、要用の事起るに際し、臨機應變自由に活用す

べし、然らずして徒に書籍を擁し目錄を記憶したるを以て足れりと思せば、用ゐんとする機會到て急場の間には合はず、其不便云はん方なかるべし」と、孟子にも「博く學んで詳に之を説くは將に以て反て約を説んとするなり」といへり、然れば古人の博學を勉むるも或る至約の説を研究せんが爲なれば多に誇り博さを示さんが爲に非ず一科の學を研究する補助として他の學科をも窺ふなり、諸君も追々専門の學に従事するに至らん、なればアベルニヨ及びスマイルスの説を守ることを肝要なるべし、

(問詞) (一) アベルニヨ氏は何といひしや、

(二) スマイルス氏は何といひしや、

(三) 孟子は何といひしや、

(四) 博學を勉るは何の爲なりや、

(五) 然らば、諸子は日々學習せる處の諸學科を、如何にするや、

第八章

題目 倉の内の財は朽つることあり、身の内の才は朽つることなし、

例話 渡邊ますの話、

目的

才智なきものは、多くの財産を譲り受くるに雖も、只之を消耗するのみにて、之を増殖すること能はず、故に必ず盡くる時あるべし、才智あるものは自ら發作して財産を生み出すことを得、而して其智盡くる時なし、是眞の寶庫なりと論す、

東京牛込南横町に、巴繪湯と呼ぶ湯屋あり、主人は渡邊某とて、一人の娘あり、名をますといふ、幼時より、心立優しく、甚く讀書を好むより、兩親も大に喜び、學問に精を出させしかば、今は女子師範學校附屬女學校へ通學し、螢雪の窓に課業の書をさし展べて、大成の日を樂みつゝあり、偕て放課後家に歸れば、毛糸細工に、春の永き日をも忘れて、手甲靴下襟卷等、自ら模様を新規に工夫して、毛糸屋へ持ち行きて、一日平均十二三錢づゝの内職をなし、猶父母より受くる小遣をも貯蓄して、學資の補助になさんどて、次第に殖ゆるを樂み、明治廿四年一月までにて、既に三拾壹圓餘の高にのぼりしを、此頃母が計ら

すそれを認めて、大に不審を抱きて、父に告ぐるに、父も大に驚き、其由をますに問ひ尋ねしかば、ますは明細帳を出して、明細に説明せしにぞ、兩親も其篤志に感じ、益學問を奨励しつゝありとぞ、

學問を好み、手工を勤め、節儉を守り、且つ明細に帳簿を記する等當世に稀なる品行なります女の如きは實に女子の龜鑑といふべし、

(問詞) (一) ます女は何處の子供なりや、

(二) 其性質如何、

(三) 今は何處に入學し在るや、

(四) ます女は家に歸り何事をなすや、

(五) 父母は何事に驚きしや、

(六) ます女は如何にして兩親の疑ひを解きしや、

(七) ます女は幾何の徳を備へしや、

第九章

題目 才智は、善良の心、端正の行と、一體となすべし、

例話 教育家ペスタロヂー氏の名言、

目的

人の心力は三大部に區別され才智、情愛、決意となる此三力平均する時は賢人となり、才智のみ長ずる時は悪人となる、故に三力平均を勉むべしと諭す、

人既に才能を天より得たれば、之れを崇重し、之れを當然に用ふることを務むべきなり、然して茲に着眼すべきは、智見學問は、必ず善良の心に伴ひ、端正の行ひに合ふを要す然らざれば、學問智見は反て大害を醸すの原因たるのみ、

瑞士の教育家にして、公衆の學識を開かんと心に、心を用ゐたるペスタロヂー氏曰く、才智のみを養ひ長ずる時は、却て人の害となるものなり、故に凡百學問の根本は、端正なる心志の田地に挿み、之を修養すべし、蓋し學問は人をして姦究背逆の大罪に陥らざらしむべけれども、之をして自ら私するの惡に入らざらしむこと能はず、自ら私するの惡を避けんと欲せば、必ず堅固なる道理、及び善良の慣習を以て、之を堤防すべきなり、然るに廣く世間を見

るに、才智勝れ學問博しと雖も、心術邪曲、品行壞惡にして、他人の模表とならず、却て人の懲戒的の目標となるもの少からず、今世の人、學問は才能なりといへる諺を多く引くと雖も、亦「學問は狂肆なり、暴威なり、驕慢なり」といふことを得べしと覺ゆ、何となれば特に學問のみにして、善く之を導くの主宰なくば、不良の人は之に由りて益々世を害すべく、學術の社會は轉じて魔鬼の會堂と爲すべければなりと、

(問詞) (一) 教育大家ペスタロヂー氏は、何と言はれしや、

(二) 智能の用ひ方によりて、世を害するとは、如何なる譯なりや、

(三) 諸子の學問をなすは、如何なる爲めなりや、

(四) 諸子は修身學は何の用を爲すと思ふや、

第十章

題目物に本末あり、事に終始あり、

例話 英國の畫工ゼームス、トルニルの召使某の話、

目的

事物の理に明なるさいふも、其要は本末輕重を知るに外ならず、或は時節を見計ひ、或は場所を見計ひ、機に應じて處置せざるべからず、平生此心掛ある者は、變事に遇ふても、早速の取計ひ出來て、事の大小によらず功を顯はすことあるべしと論す、

英國の畫工ゼームス、トルニル、或時「セントポール」といへる大寺の圓天井に、繪を抽かんことを依頼されければ、トルニルは高く足代を架け、日々其勞に服せしが、或日自ら其繪畫に眺め入り、種々に工夫を凝らして、知らずく透巡し、果は今一步を踏まば、足代を離れ、數丈の下に落ちんとする危き折しも、傍らに居りたる召使某は、見るより大に驚きたるが飛掛りて止むる暇もなければ、持合せたる繪具の皿を、矢庭に天井に投げ付けたれば、トルニルは大に驚き、且つ怒りて、繪の方へ進み寄り、こは何事ぞ、狂亂せしか不届者めとて、某の罪を責めんとしたるが、某は其舉動の次第を委しく話せしかば、トルニルは更に大に驚き、言ふべき言葉もなしとて、深く其機轉を賞せしといふ、今此時の有様を考ふるにトルニルが片足を外して落んとする機に臨み、や

れ危しと聲を掛けなば、却て足の踏み場を失ひ、遂に數丈の下に、身を碎くこと必定なり、然れば、此時に當り、差掛り其命を救ふの術は、唯小の虫を殺して、大の虫を救ふの方便によらざるべからず、此召使よく其理を悟りて、咄嗟の間に、其利害を決斷し、其機を失せず、主人の生命を全せる膽力、實に感嘆すべきものなり、

(問詞) (一) トルニルは「セントポール」寺の天井に抽くとき、如何なることありしや、

(二) 召使某は如何せしや、

(三) トルニルは此召使を如何せしや、

(四) 何故に賞せしや、

(五) 生命と繪畫と孰れが貴きや、

(六) 諸子は臨機應變の才を養はんとするには、如何なる方法に依らんとするや、

第十一章

題目 至誠無息

例話 英吉利國のニュントの話

目的

事業に志厚き者は、其事を寸時も忘るゝことなき故に、耳目に觸るゝ所、悉く之と關係を有する様になりて、其材料は左右に充満するに至るべし、但し至誠に非ざれば、此無息の位置に到る者に非ずと論ず。

昔し英國のニュトンは、林檎の實の樹より墜つるを見て、地球に引力あることを發明し、以て日月五星運行の理を明にし、理學の基礎を立てし名家なるが、其言に曰く、予は常に其事を思ひ、暫時も措くことなく、朦朧として微しく明なことを得たりしより、次第に進みて終に圓滿の光りを見るに至れり、と、此の言に依りて考ふれば、ニュトンの大發明をなして、其名を世界に播くに至りしも、特に天才に由りて、偶然に得たるにあらず、久しきに耐へ、勤勉によりて初めて得たる結果なることを知る可し、或はワットが鐵瓶の蒸氣を眺めて、蒸氣力を發明せしも、皆同一轍に出づ、然れば我人も何事にても常住心に

忘れず、研究する所あらば、古人未發の眞理を知得することあるべし、諸子之を勉めよ、

(問詞) (一) ニュートンは何に依て、世界に名高きや、

(二) 引力の發明は、如何して爲せしや、

(三) 常人は林檎の木より落つるを見ても引力を發明せざりしは、何故なりや、

(四) 然らば一の發明をなし、又は一業を遂げんとするには如何すべきや、

第十一章

題目之を知るは難に非ず、之を行ふ實に難し、

例話 サークウォールター、ラレーの話、

目的

加減は、誰れも知れる算術なれども、眞に之を應用するに至りては、其人を得難し、凡百の學藝皆然り、何程學問せしめても之を實際に用ふるに非ざれば益なしと驗す、

英國の女皇エリサベスの寵臣に、サークウォールター、ラレーといふ人あり、曾て米國に渡航せし時、土人が煙草を喫するを見て大に之を奇とし、此草を持ち歸りたり一日ラレーは煙管と煙草とを携へ、女皇に謁し、奏して曰く「臣請ふ女皇の爲めに此草の煙の重さを量らんと、女皇大に笑て曰く「汝煙の重さを量るを得るか、果して出來得は、朕汝に所望の物を與ふべし」と、是に於てラレーは煙草を摘み、先づ其重さを秤り、後之を煙管に填めて、一喫の後、其殘灰を取りて之を秤り、其量を前に量りたる煙草の量より減じ、奏して曰く「請ふ其重の前後相等しからざるを察し賜ふべし、此殘量は即ち煙の重さなり」と、女皇大に其頓才と工夫とに感じ、厚く賞賜せしといふ、古語に「玉琢かざれば光なし、光なきを石瓦とす」と、人々練磨して、頓智工夫の妙域に熟達すべし、

(問詞) (一) ラレーは女皇に何と奏せしや、

(二) ラレーは如何なる方法によりて煙の重量を秤りしや、

(三) ラレーの應用せし算術は何なりや、

- (四) 諸子は此算術を能くするや、
- (五) 古語に何とあるや、

第十三章

題目明暗を以て行を異にすること勿れ、

例話 或人と童子との問答、

目的

己の以て當然なりと思ふことを爲せば、心自ら快前に、不當と思ふことをなせば、心に苦痛を感ず、之其良心に背きたればなり、故に人々吾が良心に従ひ事を爲べしと諭す、

品行の善良なる人は、場所の異同によらず、自ら當然なりと思ふ所の事にあらざれば、苟も之を行はず、斯の如きは我身に反省して少しも精神に苦痛を感ぜざるなり、

昔一老人あり、童子に問ふて曰く「汝先きに我室に入りし時、余は外に在り、又他に見る人もなかりしに、何故に机上の梨を食はざりしや」と、童子答へて曰く「吾れ先きに學校に在るの日、教師より揚震の四知といふことを聞きたり、

故に吾は揚震に及ばずとも、近からんことを求むる故に、食はざりし」と詳に揚震の四知を物語りければ、老人感嘆して曰く「余が年齢は汝に長せること多きも、美德は遙かに汝に劣れり、是れより汝を以て我が師範となすべし」といへり」とぞ、

此童子は、其受けたる訓誡を守りて、少しも違はず、以て吾が尺度とす、斯くの如くにて益進まば、君子たること得て待つべきなり、人には天然に良心を有す、事の正邪、曲直、是非、善悪は痴漢にあらざるよりは、無學文盲の者と雖、判別するの力を有す、故に苟も事大小となく、此良心の向ふ所に従て、行ふときは大過なかるべし、

(問詞) (一) 老人は童子に何と問ひしや、

(二) 童子は老人に何と答へしや、

(三) 揚震の四知とは如何、

(四) 童子の言を聞き、老人は何といひしや、

- (五) 良心とは如何、
- (六) 諸子は何を以て、吾が行爲の指令者とするや、
- (七) 若し良心に背きて事をなせば、心に如何なる感情起るや、

第十四章

題目 己を頼む者は勝ち、他を頼む者は敗る、

例話 兵卒の折劍を叱せし話、

目的

獨立獨行の思想なきものは、恰も生命なきが如く、生きて其甲斐なし、故に奮て獨立心を發せよと諭す。

曾て西洋の或國に、一兵卒あり、敵と戦ひ、一撃の下に之を殺さんとせしに、劍折れ、劍を蒙りて倒れければ、士卒は右手に折劍を捧げ、左手に楯を持ち、大に叱して曰く、予數年の久しき、汝を愛せし所以は、徒に寵弄せしにあらず、身の一大事あらん時の用に供せん爲めなり、然るに今日の決戦に、此の如く折れて失敗を來せしは、頼み甲斐なきことかな」と、折劍を投げ、首を垂れて大息せ

しかば、折劍答へて曰く、善く戦ふものは、劍を頼まず、劍を頼む者は、敗る、天下の事皆然らざるはなし、左のみ我を責めたまふなど言ひけるとぞ、

福澤先生、曾て慶應義塾卒業生に告げて曰く、前略、凡そ人生に大切なるは、獨立の一義にして、人の人たる所以は、唯此一義に在るのみ、榮辱の分るゝ所、君子小人の異なる所、畢竟其人の獨立如何に存することにして、一人一家より一國に至るまで、苟も獨立せざるものは、人にして人に非ず、家にして家に非ず、國にして國に非ずと云ふも可なり、(中略)之を手近く今日の人事に就て其要を説かんに、第一知見を廣くすること要用なり、限りある人智なれば、他人に諮詢して利益を求むるは當然の事なり、人間相互の務めなれども、人生の行路萬般の事に當り、常に思案に窮して人に依頼し、自身は有れども無きに等しく、唯他人の言ふがまゝに任せて、身を進退するは、無學者流の事にして、其趣きは家に一錢の貯へなくして、他の惠與に食ふ者に異ならず、(中略)人たる者は、我は我が道を行き、頼に汗して自力に食み、貧なれば貧に居り、幸に富を

得ば、又其富に處し、道理外の財物は、一毫も與へず、一毫も取らずして、身を終る可きのみ、錯雜極まる社會の中には、節を屈して利を求むるの道なきに非ずと雖も、其節を屈するは、自身を無き者にして、他人に依頼するの意味なれば、我が一身を、人非人の地に下して、利を得るものなり、之を形容すれば、一塊の黄金と我が身体とを、兩々相並べ、身を捨て黄金を取るもの、如し、如何となれば、精神の獨立を失ふて、人非人の位置に墮落したる者は、生きて動物的活動を演ずるも、人生の靈は、既に斷絶したる者なればなり」と、

(問詞) (一) 福澤先生の言はれたることを簡短に述べれば如何、

- (二) 西洋の或る一兵士は如何せしや、
- (三) 兵士は劍に何といひしや、
- (四) 劍は何と答へたるや、
- (五) 此兵士は何故に不覺を取りしや、
- (六) 此話は何の譬なりや、

(七) 諸子は後來如何に注意さるゝや、

第十五章

題目 國を憂ふる者は、一身を顧みず、

例話 和蘭國の少年の話、

目的

國郡村落の爲に、災害を除くことを得れば、我一身の如きは、惜むに足らざる者なれば、身命を顧みず盡力すべし、又古老の言傳の如きは、常に記應して、其兆徴を見れば、猶豫せず、豫防すべしと諭す、

和蘭國は、土地極めて低くして、其最も甚しき所に至ては、海水より低き所あり、故に其意を取りて國名となし、和蘭とは低窪の意義なりといふ、故に國人海濱に長堤を築きて、海水の浸入を防ぐを常とす、一少年あり、日暮家に歸らんとして、此長堤を過くるに、堤下に罅隙ありて、海水是より洩れて内に入る、少年之を見て大に驚きて曰く「吾聞く長堤一たび壞るゝ時は、海水國中に汎濫し、人畜田園を沈没して跡なきに至ると、今吾速に此水を防がざれば、終に一國の大害を醸さん」と直ちに堤下に降りて、手を

以て塞々に、時しも天氣非常に寒く、北風雪を吹きて、往來絶へ、之を告ぐるに由なければ、飢寒の苦痛を耐へ、以て長き一夜を明しける。翌くれば、一人の堤上を過ぐる者あり、此少年の様を見て、異みて問ふて曰く、「汝何をか爲す」と、少年答へて曰く、「堤下に隙あり、海水是より洩る、故に昨夜來之を防ぎ居りし」と、其人聞きて且つ驚き且つ感じ、走せて堤下に赴き、代りて之を防ぎ、終に全國恙なきを得たりしといふ。

(問詞) (一) 和蘭國の地勢は如何、

- (二) 少年は何を見出せしや、
- (三) 其時少年は如何にせしや、
- (四) 其夜少年の苦痛は如何なりしや、
- (五) 翌日少年は如何せしや、
- (六) 若し少年が海水の洩るゝを見ても、之を防がざりしなれば、國中は如何ならんか、

(七) 此少年の行爲は、如何なるものと思ふや、

(八) 諸子は居村に關して古老の言傳を聞きしことありや、

第十六章

題目 勞働は天より命ずる所なり、故に尊卑を問はず、人は皆勞働すべきなり、

例話 倉持傳五郎の話、

目的

巨万の資金あり、雖も恃むに足らず、其身未熟にして、多く資金を有する時は、是れ失敗の前兆と知るべし、苟も事を成んと思はば、勞働を以て資本となすべし、金錢を恃むべからずと論ず、

倉持傳五郎は筑前博多の産にて、絹屋傳兵衛の次男なり、廿二才の時、父より金三十兩を貰ひ受け、江戸に來り、伯父正藏の家に寄宿し、毎朝家を出で日暮に至りて歸る、一日伯父傳五郎を側近く招き、問ひける様、汝は何の目的ありて江戸へ來りしぞと、傳五郎曰く、父に資金三十兩を請ひて來れば、何がな好き商業に取付きて一身を立てんと答へければ、正藏笑ひつゝ、遠國より江戸

に來り商業を爲すに、資金ありては覺束なし、悠々と商家の事情を察せよとて、意にも介せざる様子なりしに、斯くて傳五郎は所持の金を残りなく遣ひ果し、當惑の跡を見て、伯父正藏大に喜び、復た傳五郎を呼びて曰く、汝に始めて資金を與ふべければ、此錢を持ちて商業に取付べしと、錢八文を出したり、傳五郎驚き呆れたれども、伯父の深意もあることならんと、自ら種々に思ひを凝らし工夫を練り、漸く思ひ當りて、此錢を以て藁を買ひ、錢串せんざしを作り、之を持ちて諸所の商家へ至るに、皆便利なりとて買ふ者多かりき、是れ藁にて錢串を工夫したる初めなり、是より傳五郎瞬時も怠ることなく、勉強して賣行さければ、忽ち數百金の利を得たり、其後本國より博多帶地を取寄せ問屋株となり、其家富有を極むるに到りしとぞ、

是れ偏に辛苦の結果なり、數多の資金を擁し安逸にして巨利を得んとする者は必ず失敗する者なり、故に人々必しも勤勞して其結果より利益を得る様心掛くべきなり、

- (問詞) (一) 傳五郎に伯父は初め如何と問ひしや、
 (二) 傳五郎は何と答へしや、
 (三) 伯父は何故に傳五郎に僅に八文の資本を與へしや、
 (四) 如何にして傳五郎は立身せしや、
 (五) 誰にても傳五郎の如く辛苦せば立身し得らるゝや、
 (六) 他に安逸にして立身さるゝ道ありや、
 (七) 然らば諸子は後來如何にして、立身せんとするや、

第十七章

題目 智慧ありと雖も、勢に乗るに如かず、

例話 田中平八の話、

目的

世の中は極めて錯雜せる者にて、單一の論理は到底行はれざる者なれば、時勢を知るを務むべし、時勢に適したる事業は勞して功あるべしと諭す、

田中平八氏は長野縣上穂の人なり、幼にして奇才あり、年長するに及びて、專

ら蠶業に従事す、常に云へらく「吾れ願くは大業を興し名を天下に擧げんと日夜苦慮に沈みけり、此時に當り、西洋船初めて横濱に入り、幕府該港の貿易を免したりしかば、平八大に喜んで曰く「是れ方に吾が素志を遂ぐるの秋なり」と横濱に移り一小舗を開き、郷里より生糸を持來りて外商に鬻き、又金銀を賣買し、或は製茶を輸出する等、苟も利あると認めれば、努力其れに従事して怠りなかりしかば、日を送ひ月を経るに従ひ、商勢益擴張し、遂に巨萬の利潤を得るに到れり、明治三年氏は首唱となり、横濱に一商社を開き、自ら頭取となり、又東京に支店を設け、大に商業の發達を計れり、後八年東京蠣殻町に商行會社を設けて、期月米を賣買し、同十年長野縣廳爲換會社を、東京坂本町に立て、尋て第百十二國立銀行を開き、自ら之が頭取となり、遂に豪商紳士の名を天下に博し、以て幸福を子孫に傳ふるに到れりといふ、

(問詞) (一) 田中平八氏の幼時如何、

(二) 田中氏は何業に従事せしや、

- (三) 田中氏は横濱に移りて、如何に辛勞せしや、
- (四) 田中氏の興したる事業は如何、
- (五) 田中氏の豪商紳士となりし原因如何、
- (六) 諸子は後來實業に就くときは如何するや、

第十八章

題目 人の訾りを耻ぢず、人の笑を忍ぶ者は、遂に大業を成す、

例話 杉山和一の話、

目的

不具にして愚鈍なる者、雖も、刻苦勉勵の功を積めば、其技藝に長ずる者なれば、完全の身體を以て、何ぞ成し得ざらん、然るに身體の完全なる人は、若し其才の拙きを笑ふ者あれば、自ら恥て沮喪すること多し、是れ其成功を得ずして、盲人にも如ひざる所以なり、決して自暴自棄す可らずと諭す

杉山和一は、大和國の出生なりしが、幼にして兩眼を失し、父母早く世を去りて、便なきより遙々江戸に來りて、山瀬琢一に就き、鍼術を學びしが、性得魯鈍にして、其進み方甚だ遅く、朋輩の笑ひものとなりしも、日夜撓まず勉勵せしかば、其功空しからず、數年の後遂に熟達して、鍼術の蘊奥を極め、後に檢校の

筆頭となれり、或時徳川將軍綱吉公和一を召して其病を療治せしめしに、即効ありたれば、厚く和一を賞せんとて、「汝何をか欲す」と問はれけるに、和一對て曰く、「願くは一ッ目を得たく存じ候」と申せしかば、綱吉公其不具を憐まれ「吾れ能く汝に一ッ目を與ふべし」と、本所一目に於て邸宅を賜ひ、祿五百石を與へられ、是より將軍の眷顧を得て、遂に關東總祿檢校となり、大に其術を國內に擴め以て身を終れりといふ、

- (問詞)
- (一) 杉山和一は幼年の時、如何なる困難に逢ひしや、
 - (二) 江戸に來りて如何なることに志せしや、
 - (三) 和一の性質は如何なりしや、
 - (四) 脩業の後は如何になりしや、
 - (五) 將軍綱吉公の病氣を鍼して、如何なることありしや、
 - (六) 和一は終に如何なる名譽を得しや、
 - (七) 性質魯鈍の和一が、如何なれば斯く立身せしや、

(八) 然らば何業によらず、熱心と勉勵とを以て成就することを得べきや、

(九) 題目の意味は如何、

第十九章

題目必ず忍ぶこと有れば、其れ乃ち濟すこと有り、

例話 唐の張公藝の話、

目的

一家の調和に於て、忍字の必用は勿論、處世百般の事に於ても、同様なれば、公藝の如く、忍の字を服膺すべしと諒す、

支那唐の張公藝の一家は、九世の久しき同居して家内輯睦し、曾て小風波の起りしこともなかりしも、北齊隋唐の世に當り、皆門閭に旌表せられたり、唐の高宗巡幸の序に、其宅に幸し、公藝を召して、其族人の親睦する所以の道を問ひ玉ひければ、公藝即ち大なる紙を持來り、忍の字數百を書して進めたり、其意宗族の協はざる所以は、尊長の衣食、或は均しからざることあり、卑幼

の禮節、或は備はらざることあり、其時に當り、更るく相責め相望むときは、遂に相互の隔離を生じ、相乖き相争ふに至る、然るを相與に之を忍べば、家道雍睦、間然する所なし、之を要するに唯忍の一字を服膺して、常に相忘れざる様になすのみと、高宗大に感じ厚く賞せしと、書經に曰く、必ず忍ぶことあれば、其れ乃ち濟すことありと實に信なるかな、

(問詞) (一) 公藝の家は何世の間同居せしや、

(二) 公藝の家は何々の朝に旌表されしや、

(三) 旌表は何の爲なりや、

(四) 高宗帝は公藝に何を問はれしや、

(五) 公藝は如何に答ひしや、

(六) 此題目の意味は如何、

第二十章

題目 信實は品行の骨子なり、

例話 周公と王莽の話、

目的

外面を裝飾して、人を瞞着する者、世に其人なきに非ず、然れども元來信實より出てたるに非る故に、早晚破綻して、大なる耻辱を受く、品行を人に信ぜられんと思はば、必ず先づ心に信實を守るべしと諒す、

昔支那周の武王崩じ、成王幼少にて即位せしかば、武王の弟周公旦、代りて政を攝行せり、武王殷を亡して未だ年數も多く、歴ざれば、前代を思ふ者も、少なからずして甚だ氣遣はしき時節なる故、周公は已むを得ず、假りに王の如き權勢を行ひたり、然るに周公の兄管叔及び其群弟等、周公を疑ひて兵を起せしかば、周公之を討平せり、後成王長じて、周公政を還して臣位に就しが、或人周公を譖せしに因り、周公懼れて楚といふ國に出奔して、害を避けたり、是より先き武王の大病なりし時、周公其身を以て王の死に代らんことを神に祈りて王の病癒たることあり、其祈禱の策を封緘して、王府にあれども、誰れも之を知る者なかりしが、此に至り成王之を發見し、周公の信實なるを知り、感泣して召し反せり、周公は盛徳あり且つ多才多藝にして、支那にて聖人と稱

せらるゝ人なり、爰に又前漢の末に當り、王莽といふ者あり、王氏は數世の間、天子の外戚にて政權を握り、諸王氏頗る驕暴なりしが、莽獨り恭儉にして賢者を尊敬せしかば、其盛徳を稱せざる者なし、元來莽は王氏の嫡統に非りしも、其品行の善きを以て段々出世し、遂に政權を掌握せしが、自ら周公に比して其行狀を真似たり、或時天子病氣に罹り玉ひければ、莽身を以て代らんと神に祈り、其策を封緘して王府に藏め、左右を戒しめて言ふこと勿らしむ、然れども莽の本心實は帝位を篡ふ積なれば、密に天子を毒殺して幼少の皇太子を立て、己れ代て政を攝行せり、後遂に漢祚を移して帝位に就き、國を新と號せしが、政事苛酷にして民心を失ひ、亂兵に殺されたり、周公は天下危急の時に當り、嫌疑を犯して大權を専らにせしも、其心誠實なる故に、後世までも之を尊崇せり、王莽は祖先の積威もあり、諸人の尊敬をも受けたれども、其品行は虚飾にして本心は利欲を専らとせし故、亂兵に殺され、後世其善行を稱する者なし、

(問詞) (一) 武王崩じて周公政を攝したるは何故なりや、

- (二) 周公の弟兄は如何せしや、
- (三) 成王長じて後に周公に如何なる事ありしや、
- (四) 王莽は如何なる家柄なりしや、
- (五) 諸王氏の品行如何、莽は如何、
- (六) 莽が政權を握りし後如何なることありしや、
- (七) 莽は周公を真似し何故に亡びしや、

第二十一章

題目 民信すること無ければ立たず、

例話 名和長年の話、

目的

其人の身分重ければ、契約履行の責任随て重し、もし一郷の名望家なれば只一人に信を失ふも、一郷の人皆之に背く、一國も此の如く、天下も亦然り、故に信義を守るべきは貴賤尊卑に依るべからず、雖も勢威盛んなる人は、取り分て大事なりと論す、

南朝の名臣名和長年は、其父嚴格にして教訓行届きたる人なり、或時牛を牽

きたる童子の、牛飼歌をうたひて過ぎければ、長年は幼な心の面白さに、跡追ひかけて、童子を呼び止め、「我を其牛に乗せて、彼所の川邊まで行けかし」と言ひけるに、童子肯ひて答ふる様、されば賃には、何を賜はるぞ」と、長年我が家を顧みて、門前に繁りたる松樹を指して、「何れの木なりとも、汝の撰みに任すべし、疾くやれ」といひければ、童子悦び、長年を約束の如く、川邊まで乗せ行きたり、其後三年程経て、一人の男子、童子を伴ひ、長年の家に来りて、申入る様、「三年前云々の約束あり、今日は松樹引取りの爲め参りたり」と、長年幼な心の戯れなれば、今は詮術なく困じ果て、見えけるを、父之を聞きて、果して約束せしに相違なくば、速に松樹を遣はすべし」とて、童子の望みに任せ、門前なる松の大樹を、牛飼童子に與へけるとぞ、

長年の家柄は、伯耆の豪族にて、其威勢強かりしも、信義を重んじて、牧童さへも之を欺かず、其餘の行状は推して知るべし、後に後醍醐天皇隠岐より潛幸あらせらるゝに及んで、長年宗族を率て勤王の旗を擧げ、大功を立てしは、以て其郷國の人望を得たるを證するに足るべし、是即ち平生信義を重んせし結果なり、

- (問詞)
- (一) 長年の父は如何なる人なりや、
 - (二) 或時長年は、牛飼童子に何といひしや、
 - (三) 童子は何といひしや、
 - (四) 長年は何といひしや、
 - (五) 其後如何なることありしや、
 - (六) 長年は其時如何せしや、
 - (七) 其事を聞きて父は如何せしや、
 - (八) 父は童子の戯言を有効ならしめしは、何故なりや、
 - (九) 長年は後に如何なる人となりしや、

第二十一章

題目財に臨みては、苟も得ると勿れ、

例話 岩崎忠藏の話

目的

金錢に眩惑して不義不信の人となる勿れと諭す、

世に信用を受くると不信用を招くの原因多しと雖も、其最も主なるものは金錢なり、故に人々信用を得ると否とは一に金錢上に係るといふも、強ち誣言にあらざるべし、然れば人たるもの財貨に關しては、最も慾を抑へ良心を張り、不義不正に陥らざる様、深く注意せざるべからず、禮記に曰く「財に臨みては苟も得ると勿れ」と、實に金言といふべきなり、

茲に例話として示すべきは、東京府下中野村岩崎忠藏といへる者なるが、忠藏常に和田村加藤丑太郎に物品を賣りしが、或時丑太郎より銅貨を以て其價を償ふ、然るに誤りて、其中に十圓金貨一箇を交へありしも、二人共に心付かず、互に受渡しも濟みて、忠藏家に歸り、銅貨を検するに、中に金貨の有るを見るも、其由來する所を知らず、熟思すること數日に渉り、忽ち悟りて曰く「是恐らくは丑太郎殿より受けたる代金中に交じり有りたるならん」とて、直ち

に丑太郎の宅を訪ふて之を質すに、丑太郎は他へ遺失せしならんとて、今しも尋ねつゝありし時なれば、大に喜び、忠藏の信義に感じ、厚く謝せしとぞ、此事を聞き及びたる近隣の者は、忠藏の正直に感じ、深く信用せしかば、忠藏の家業益繁昌に趣けりといふ、

(問詞) (一) 忠藏は如何なれば近隣の信用を受けしや、

(二) 若し忠藏にして金貨を返さず吾が物とせば如何、

(三) 人の信用と不信用とを招く原因は、多く何事に因るや、

(四) 信用あらば如何なる徳ありや、

(五) 不信用なれば如何、

(六) 然らば信用を得んには、如何せば可なるや、

第二十三章

題目 禮は、人の思ふ儘ならんと欲するを、防ぐものなり、

例話 支那東漢の張湛の話

目的

古禮習慣を蔑視するは、年少者の惡癖なれば、其心を抑制して、預め大過失を防ぐべしと諭す。

東漢の張湛は、常に矜嚴にして禮儀を重じ、居處自ら修整し、妻子を遇する、毎に禮法を説き、前言往行を以て之を教誨し、其相對する賓客の如し、故に妻子も亦相敬し、一家和して流れず、秩序整然として、祥瑞の氣家に満ち、いとも目出度有様なりければ、郷中次第に其風に化し、張湛を以て儀表となすに到れり、初め左馮翊といふ地方官となり、政教大に行はる、後ち故山の平陵に歸省せし時、既に郷里の境を望むや、直ちに車を下りて徒歩せり、隨行の吏進みて曰く、「明府位尊く徳高し、自ら輕すべからず」と、湛即ち曰く、「禮に公門に下り、路馬に式す、孔夫子も郷黨に於て恂々如たりと、父母の國に入る、宜しく禮を盡すべきなり、何ぞ自ら輕んずと謂んや」と、吏員之を聞き、皆感嘆せしとぞ、氣隨氣儘は人の流れ易き所、若し之を羈絆するなくんば、遂に無極の底に陥るべし、故に禮法を以て之を防ぎ、人の人たる道を盡すべきなり、

(問詞) (一)張湛は如何なることを貴重せしや、

(二)妻子に對して如何、

(三)張湛の一家は如何、

(四)其郷中は如何なりしや、

(五)張湛歸省せし時、車を下り徒歩するを見、吏員は何といひしや、

(六)張湛は何と答へしや、

(七)禮法は如何なるものなりと思ふや、

(八)然らば諸子は、父母に仕へ、長上に對し、友人と交際し、一家を治

むるに何を標準とするや、

第二十四章

題目 するつひに海となるべき山水も、まほし木の葉の志

たくゞるなり、

例話 春澄善繩の話

目的

驕傲は人の最も悪む處にして、謙遜は人の最も好む處なれば、驕傲を矯め謙遜に身を持つべしと諭す。

人の心は小にして低くし決して驕慢の心なく人に謙らんと最も肝要なり
謙遜にして驕慢ならざるは身を立て事を爲すの基本なり古人の歌に「末つ
ひに海となるべき山水も、まばし木の葉の下くゝるなり」と是れ謙遜を貴び
驕慢を誠むる意なり諸子等能く銘記せよ、
昔春澄の善繩は、智慮衆に秀で、人皆呼びて神童となす程なりしかば、其父豊
雄奇しき者なりとて、深く之を愛し務めて學問を奨励せしかば、善繩日夜勤
勉して手に卷を捨てず、されば年漸く長するに隨ひ、博聞強記の譽れ高く、淳
和仁明文徳清和の四帝に歴事して、大に親任を蒙り、高位顯官に登りける、さ
れども常に謹慎素朴を貴び、苟も己の長を以て人を凌がず、謙遜辭讓して己
れ知らざる者の如し、其文章博士たりし時、他の博士等互に黨派を立て相輕
侮し、己を是とし他を非として、爭論絶ゆる間なかりしかば、從ひて人の誹謗

嘲笑等止むことなかりけれども、獨り善繩は美名を全ふして、人に羨慕せられしと云ふ、

(問詞) 一 諸子は驕慢の人を見れば如何に心に感ずるや、

二 謙讓の人を見れば如何、

三 善繩は幼時如何なる評を受けたるや、

四 成長して如何、

五 善繩は何帝の親任を蒙りしや、

六 善繩の品行は如何、

七 他の博士等は如何、

八 何故に善繩は誹謗の世に在りて、獨り美名を全ふせしや、

九 謙讓の徳及び驕傲の損は如何、

十 然らば諸子は如何に其身を持たんとするや、

第二十五章

題目 自敬すれば、人之を敬し、自慢すれば、人之を慢す、

例話 寺澤廣高の話、

目的

門地ある者、雖、驕慢を戒むべきこと勿論なれども、其身俄に高位に上りたる者は、殊更に抑損して、朋友舊知に隔絶せざる様にすべしと諭す、

寺澤志摩守廣高は、豊臣秀吉公及び徳川家康公に仕へて、高十二萬石を食み、從四位に叙せられたりと雖も、身元と卑賤より起りたるを以て、恭敬能く自己を脩め、常に深く驕慢を戒む、曾て臣下に語りて曰く、「城若くは山に登りて、人を俯瞰するものあるも、誰か之を咎むる者あらん、是れ人をして、我が高きを忘れしむるなり、二層三層の樓に登りて、人を視下せば、人多く之を憎む、門閥高く位尊き人は、身既に城若しくは山に在るが如し、然るに凡庸より出て人の上に在るは、其身二三層の樓に在りて、人を視下すに異らず、其之を憎むは、即ち自然の理なり」と、之を聞く者皆感化せられて、家士の風儀大に修まれりといふ、

(問詞) (一) 寺澤廣高は、豊臣及び徳川に仕へて、食む處の祿及其位如何、

(二) 寺澤志摩守は始め、如何なる處より身を起せしや、

(三) 志摩守は臣下に、何と語られしや、

(四) 志摩守の家中の風儀は、如何になりしや、

第二十六章

題目 千里の繆は一步より始む、

例話 松下禪尼の話、

目的

大患は總て微少なる原由より發するものなれば、未だ其根の長大せざる時に於て、除去すべきものなりと諭す、

松下禪尼は、秋田城介景盛が女にして、北條時氏の妻なり、一日其子時頼を招きて閑談しつゝ、手づから障子の破損を繕ひけるに、禪尼の兄義景訪ひ來り、之を見て曰く、「我が家に僕あり、是等の事を能く爲せり、明日遣すべければ、之に命せらるべし」と、禪尼曰く、「其親切は忝きが、果して其僕、我れに勝るか」と、猶紙を裁ちて止まず、義景又曰く、「煩はし、寧ろ悉く新にせられよ、新故相雜るは、

見苦しきのみならず、勞して益なし」と、禪尼重ねて曰く、たとひ明日新にするも、今は斯くして止まんのみ、凡そ物は少しく破れたる時、直ちに之を補へば、勞少くして其用足る可し、天下の政治を執る者も、亦斯くの如きのみ」と諭せりといふ、

實に禪尼の其子を教育するに切なる、身貴きをも顧みず、手づから障子を繕ひ、以て戒めとす、事皆小破の時に於て之を補綴せば、大敗を免るべきなり

(問詞) (一) 松下禪尼は如何なる人なりや、

(二) 禪尼は時頼を招きて何をせしや、

(三) 兄義景は何と云ひしや、

(四) 禪尼は何と答へしや、

(五) 義景は又何といひしや、

(六) 其時禪尼は何と答へしや、

(七) 禪尼は何故に他人に申付けず、自身障子を繕ひしや、

(八) 時頼は如何なる人となりしや、

第二十七章

題目 議論は着實を尙ぶ、

例話 鼠の會議の話、

目的

表立たる議論は勿論、平素の談話の如きも、浮大空言なる無責任の言を發すべからず、必ずや自己之を負擔するの覺悟ありて後に發言すべし、無責任の言論は、他人を益せず、又己を益するものに非らずして、却て害を與ふるものなれば、口を開けば必ず着實にして、實地に適應することなむべしと諭す、

古人、比喻に巧みなる者あり、少年の空論に趨る弊を誡めんが爲めに衆鼠集會の一話を設けたり、其話に曰く、曾て衆鼠あり、屢猫の爲めに害せらるゝこと、其數を知らず、衆鼠之を憂ひ、一夜空家に相會して、其害を防がんことを論ず、議論百出、駁するあり、賛するあり、衆鼠心力を盡して相議するも、終に妙計を按出するものなし、時に若鼠あり、姿勢驕傲、口角泡沫を飛し、滿場を見下しつゝ、末席より進み出で、曰く、我輩屢彼れに害せらるゝは、畢竟するに、彼の近づくを知らざるに由れり、幸に我に一計あり、今より後は、彼れの頸に鈴を

懸け置かば、彼れが來ること知り易くして、我輩等の之を避くることも、亦容易ならん」と、衆此の計を聞き、大に感歎し、議遂に決せんとす、時に傍に老鼠あり、始めより未だ一言を發せざりしが、此場に至り徐に其席を立ち、坐中を通覽して曰く、「此策極めて妙、且つ其功績も亦必ず莫大ならん、然れども老生の安心せざるは、此策を施さん者は誰なるや、發議者親ら其任に當るや否や、其上にて賛成せん」と述べければ、若鼠一言の對ふるなく、衆鼠も亦見て言なかりしとぞ、

坐上の空論、樓上の水練は、識者の痛く排する處なり、

(問詞) (一) 鼠は多く集りて如何なることを討議せしや、

(二) 若鼠は如何なることを述べしや、

(三) 若鼠の言を聞き、滿場如何せしや、

(四) 老鼠は何といひしや、

(五) 若鼠は此時如何に答辨せしや

(六) 此話は何の譬なりや、

第二十八章

題目 誠は妄語せざるより始む、

例話 劉元城の語を謹みし話、

目的

行ふべからざる事は口に説くことなく、敬慎にして言行を一致にし、身を修むべき旨を諭す。

古人も、妄りに言を發せば駟馬も逐ひ難し」と又、口は禍の門といへり、是れ皆言語の輕發を誡めたるなり、昔支那宋の劉元城、司馬光に見えて、心を盡して己を行ふの要を問へり、温公曰く、「其れ誠か」元城曰く、「之を行ふに何をか先にせん」と、温公答へて、「妄語せざるより始む」と、元城之を聞き、初めは最と容易なりと思ひしが、退きて自ら省察するに、日々行ふ所、言ふ所、常に相合はざる者多し、元城心を盡し、力めて行ふこと七年にして、始めて言行一致して相應ずることを得たりしとぞ、古來より言行一致は最も艱難中の艱難と爲すと雖

も、諸子の如き少年者は、元城に於けるが如く、盡力して妄言を吐かず、一度口に出たせば、早晚之を行ふことを期すべきなり、

(問詞) 一元城は、温公に何を問ひしや、

(二) 温公は何といひしや、

(三) 次ぎに元城は何と問ひしや、

(四) 其時温公は何と答へしや、

(五) 元城は何年盡力して、言行一致することを得しや、

(六) 古人は言語の輕發を何と戒めしや、

(七) 諸子は己れの爲し能はざることを口にすることなきや、

(八) 然らば如何なることを口にして可なるや、

第二十九章

題目 油斷大敵

例話 井伊掃部頭直孝と永井信濃守尙政の話

目的

油斷程世に懼しきものはならず、人皆之を知る然れども油斷する者多し、我々若し此大敵に勝つことを得ば、其他に勝ち難き敵なしと論す、

昔寛永の頃、永井信濃守尙政といへる諸侯、連りに昇進して寵任せられける、其頃井伊掃部頭直孝は元老の職に在りしが、或時直孝に會合せし折、尙政は「拙者弱年の身にて、特恩を蒙り、斯る重職を勤め候事、誠に不相應至極の事と存じ居り、貴邊には御老功の御事、拙者職務上心得にも成るべき事共、思召さば、仰せ聞かされ度し」とありければ、直孝大に感じ、誠に奇特なる御心懸けかな、如何にも一言思付きたる事あれば、御傳へ申さん、されども大切なることなれば、今此場に於て、輕々しく申難ければ、いよく御聞取りの御所存もあれば、精進して某宅へ御越しあれ、といはれしかば、尙政日を約し、禮服を着用し、直孝方へ行きしに、直孝も禮服を着て對面し、先日御傳授申可しと約せしは、餘の儀にあらず、世話に油斷大敵といふこと、定めて御承知ならんが、傳授は是れなり、必ず御忘れあるな、といはれしとぞ、世の人事物を處理するに

當りて、油斷の懼るべきは、誰も知るころなれども、往々油斷して過失を生じ、災禍を招ぎ、臍を噬みて悔ゆる者多きぞかし、之を知るは易し、之を守ることは實に難し、直孝精進潔齋の上にて傳授せし意味至て深し、

(問詞) (一) 永井信濃守は、井伊直孝に何を問ひしや、

(二) 直孝は何といひしや、

(三) 直孝は信濃守に何と傳授せしや、

(四) 何故に精進潔齋せしめしや、

(五) 諸子は油斷大敵の譯柄を解し得るや、

第三十章

題目 人孰れか過ちなからん、能く之を改むるを貴しとす、

例話 ワシントンとペーネとの話、

目的

過失を改め執拗を矯むべしと諭す、

米國の大頭領シヨイザ、ワシントン、未だ少かりし時、一隊の兵に將として「アレキサンドリア」に在りけるが、一日ペーネといへる者と事を論じて合わざりければ、激語を以て大にペーネを罵りしかば、ペーネ大に怒り、杖を以てワシントンを撃ち倒せり、隊兵之を聞き、大に奮激し、隊將の爲め讐を報いんとせり、ワシントン之を押止めて營所に歸りしが、暫らくして以爲らく「行き掛りの爲め屈せず激論せしも、畢竟非理は我に在り、思ひ付きては、片時も猶豫すべからず、速に謝せざるべからず」と、人をペーネの許へ遣して言はしめけるは、君願くは今夕某酒舗に相見んと、ペーネ謂らく「是必ず我に報ゆるならん」と、窃に其用意をなして、日暮酒舗に至れば、酒肴案上に満ちて毫も異状なし、ワシントン歡び迎へていへらく「人誰か過ちなからん、能く之を改むるを貴しとす、先きには僕罪を足下に得たり、足下も亦我に報せらる、若し足下にして既に足れりどせば、幸に寛假せよ、今より相約して刎頸の交りを結ばんと、ペーネ大に感じ、是より無二の友となりしといふ、

〔問詞〕(一)ワシントンは、ペーチと如何なることをせしや、

(二)ペーチはワシントンを如何せしや、

(三)ワシントンの率ゆる兵士は、此事を聞き如何せんとせしや、

(四)ワシントンは兵士を如何せしや、

(五)ワシントンは何故酒舗に會合せしや、

(六)ペーチは何と思ひ、酒舗に行きしや、

(七)ワシントンは、ペーチを如何せしや、

(八)何故にワシントンは、ペーチに謝せしや、

第三十一章

題目 大功を立つる人は、必ず粗心ならず、

例話 郭子儀と王曾の話、

目的

微細の事に注意するを、煩らばしく思ふは誤なり、其煩を厭はぬは、我心を練磨する一法なり、凡失敗は、ア、煩はし、さて折捨てたる龍相より起る者也と諒す

一粒の米、一寸の糸、一片の紙屑と雖も、濫費すべきものにあらず、必ずや其用途を見出し、以て用ふべきなり、若し之を濫用せば、天理に悖り、造化の功を空ふするものにて、益其心を募長せしめば、遂には身を亡ぼし家を滅し國を傾くるものなり、之を大切にせしめて、吝嗇にあらず、小量にあらず、天物を暴殄せざる天理に叶ひ、且つ我疎漏なる習僻を矯むるには、屈強の心法なり、古より大功を建て大業を成せし人に、籠豪粗心の人なし、之を例せば支那の郭子儀の如きは、唐の宗社を中興せし、智勇兼備の良將にして、汾陽王に封せられ、身富裕なりしと雖も、常に來狀の上封を捨てず、綴りて小冊となし、日誌を認めたりと、又王曾といへる人は、宋の仁宗の太平を開きたる、勳功著しき人なれども、書簡に空白あれば、必ず之を集め置きて、人に贈物となしたりとぞ、是れ特に儉素の徳を備ふのみにあらず、無用の費を厭ひしなり、之を以て大功業を立つる人は、事物に心を用ゆる詳細にして、粗心に非ざるを悟るべし、

(問詞) (一) 郭子儀は如何なる人なりや、

(二) 王曾は如何なる人なりや、

(三) 此兩人の平生の行ひ如何、

(四) 何故に兩人は些事を詳にせしや、

(五) 粗心者は大業を爲すことを得べきや、

(六) 何故成就し能はざるや、

(七) 然らば諸子は郭子儀たり王曾たらんとせば如何にすべきや、

第三十二章

題目 珠玉寶に非ず、節儉これ寶なり、

例話 宋太祖の話、

目的

金錢珠玉を以て子孫に遺すも、子孫驕奢に長ずれば、之を守ることを能はず、節儉の美德を以て、子孫に傳ふれば、永く富貴を維持することを得べし、故に曰く節儉これ寶なり、我人の祖先は、何れも節儉を以て家法を定め、自ら享くべき福を惜みて、子孫に遺せし者なれば、能く之を遵守すべしと諭す、

支那宋の太祖は性質節儉の美德を備へられ、宮中の珠簾に代ふるに葦簾を

垂れ、縁は青布を用る、常服は再三澣濯せられたり、一日魏國長公主に謁を賜ふ、長公主襦に翠羽を飾りしを見、太祖之を戒め曰く、汝富貴に生長す、慎みて福を惜み、永く維持せんことを念ふべしとて、再び用ふることなからしめたり、又孟昶が寶玉を以て溺器を飾るを見て、直に椿きて之を碎きて曰く、汝七寶を以て之を飾れり、當さに何を以て食器となすべき、其爲す所斯くの如くなれば、天下を以て奉するも、いかでか足らんやと、又皇女曾て鋪翠の襦を以て祇候せしに、帝曰く、上たる者之を服せば、下皆相倣ふて贅品の價頼に騰貴し、小民利を逐ひ生を害ふこと浸く廣まらん、とて、遂に嚴しく禁止せり、又百官諸吏に向ひて曰く、我四海の富を有てり、宮殿悉く金玉を以て飾るも、力能く辨すべし、然れども朕は天下の爲め財を守ること念ふのみ、古へ稱す一人を以て天下を治む、天下を以て一人を奉せずと、誠められしといふ、

(問詞) (一) 宋の太祖は如何に節儉を守りしや、

(二) 長公主を何と戒めたりや、

- (三) 孟詵を何と戒めしや、
- (四) 皇女を何と戒めしや、
- (五) 群臣に何と戒めしや、
- (六) 宋の歴代十八帝、三百二十年の久きを保ちたるは何故なりと思ふや、

第三十三章

題目 奢る者は富みて足らず、儉なる者は貧しくして餘り

あり、

例話 綾部道弘の話

目的

坐して食へば泰山も空しきは、古人の金言にして古來其例に乏しからず、國家の盛衰と雖も始んと此中に存するものなれば、各人の義務と心得て節儉勤勉の美德に習れよ是れ國家繁榮の基也と諭す、

世話に坐して食へば山をも盡すと、好き金言といふべし、人如何に富み榮ゆるとも、節儉を守らず、驕奢に流るゝ時は、例令全世界の富を有するも、満足の

限りにあらず、然るに貧賤と雖も身勤儉を守るときは、其人相應に餘裕ありて心平かなるものなり、

綾部道弘といへる人は、初め極めて貧窮なりしかと、務めて節儉を守り、華飾を喜ばず、勤勞怠らざりしかば、漸く家に餘財あるに至れり、或時人あり晴れ着にとて、其子に美しき絹を遣りしに、道弘遂に着するを許さずして曰く、我祖貧にして世を終り、吾亦辛勞すること多年にして、幸に給資を得て、妻兒を煖養するを得るは、是偏に君の恩惠なり、夫れ人情儉するに難くして、奢りに易し、予と雖も子を愛せざるにあらず、たゞ奢りを慣はしむるを忌む故なりと、申されしといふ、

(問詞) 一) 道弘は如何なる人なりや、

(二) 道弘の初めの活計は如何、

(三) 道弘は後如何して、餘財あるに至りしや、

(四) 道弘は何故に、女子に美服を着せしめざるや、

- (五) 古語に何とあるや、
- (六) 其意味は如何、
- (七) 道弘は何といひしや、
- (八) 道弘の如き人を何といふや、
- (九) 諸子は、此話を聞き如何に感ずるや、

第三十四章

題目 節儉と労働とは、人に満足を得せしめ、又富饒を得せ

しむるの源なり、

例話 野々村彦左衛門の話、

目的

事物に丹誠を込め歳月を積んで怠らざれば、自ら家計に餘裕を生じ、一朝事ある時に多く財を散することを得べしと諒す、

肥後熊本の城主加藤主計頭清正に仕へて、祿三百石を受けたる野々村彦左衛門といへる人は、初め主君より宅地六百坪ばかりを割渡されしに、先づ五

十坪ばかりに家作し、三百坪を圃となし、二百五十坪に、栗梅茶等を植え、宅地の周囲には、皂莢と柳とを栽えたり、此皂莢は生枝を焼きて能く燃ゆべく、且芽は摘みて、食膳に供すべし、抑も亦薪となすに、成長最も早き木なり、既に十年程を経しかば、皂莢茶各五十株、栗二十株、梅百株ありて、皆充分に成長したれば、皂莢の實をば採りて衣服の垢を去るに用ひ、其餘りをば賣りて物に換へ、茶も飲料の外は賣拂ひ、梅子は概ね、毎年五十石の多きを收めしとぞ、さるからに彦左衛門三百石の祿なりと雖も、他の千石を領する者より家政遙に豊にして、馬二頭待四人下僕五人養ひ、武具の用意もよく整備し置きたり、彦左衛門常に人に語りて曰く、斯く吾が苦心するも、一は以て君恩の厚きに報ひ、事あるの日君の馬前に従ふ時に、諸事に不満足なき爲め、一は以て天與の土地を有用に使用して、殖産を計るためなり」と、實に彦左衛門の如きは篤敬の人といふべし、

(問詞) 彦左衛門は主君より受けたる宅地を如何に使用せしや、

- (二) 彦左衛門の祿は幾何なりや、如何にして千石以上の家政をなせしや、
- (三) 彦左衛門は常に人に何と語りしや、
- (四) 彦左衛門の如き人を何といはるゝや、
- (五) 諸子は彦左衛門の話聞き如何に感せしや、

第三十五章

題目 孝は百行の基なり、

例話 今井善四郎の話、

目的

人の務とする所は、第一に父母に事ること、其次は其人の職業身分にて種々あるべし、學問等は實は餘暇に脩業すべき者なれば、學問を口實として孝道を怠るべからずと諭す、

治世に忠臣なきに非ず、富家に孝子なきにあらず、其顯はれざるは、忠臣の忠、孝子の孝、其極端に達せざればなり、故に人謂らく貧賤艱苦にあらざれば、親に孝道を盡し得ずと、誤りも亦甚しといふべし、茲に引證する今井善太郎は

性質温順にして、夙に郷里に於て孝子の譽れ高かりしが、年甫めて十才の頃、群馬縣前橋の或學校に寄宿して、脩業に怠りなかりけれども、兩親の身上心に掛りて、毎夜夢に入らぬことなく、朝は必ず兩親の寫眞を出し、拜して御無事を祈り、日曜の休日には、如何なる風雨あるも厭はず、二里餘りの處を辿りて歸省し、兩親の麗はしき顔を拜するを、こよなき樂みとしけり、或時休日を、得て家に歸り、其翌々日新嘗祭の休暇に當りければ、翌朝夙に起き出て校舎に至り、終日課業を受け、其日の夕方復た家に歸りたれば、父は訝りて、一日に往復しては、嘸かし身体の疲勞を覺ゆるならんといへば、善四郎は潸然と涙を流して、疲勞の程は、聊か厭ひ候はねど、兎角御兩親が懐しく、片時もお忘れ申すこと出来候はずと可愛らしき答に、父も目をしばたゝき、然る心底ならば、家に教師を招くべき程に、我膝下にて學問せよと慈愛深き父の言葉に、善四郎はいよゝ嬉し涙に咽びて、尙も學業を勵みける、後數年を経て、澁川驛なる藍園翁の門に遊び、詩文經書を修むること數年、其間父母を訪ふ事、亦始

めの如くなれば、翁其志に感じ、赤城峯のあかき心をたらしねにかけて事へよ朝な夕なに、との和歌を贈れり、在學中即ち明治十七年、善四郎の父病に罹りければ、善四郎は直ちに其門を辭し家に歸り、看護數月湯藥を温め、痛痒を撫で、枕邊を去らず、殆んど寢食を廢すること久しきに互りて、父の病痼漸く癒えたり、父の病中は、常に神佛に祈誓を凝らして、病氣平癒を祈りて餘念なかりしを、或人詰りしかば、俗に病氣は氣より出づる、といふ程なれば、多少神經の關せざるなし、故に醫藥功を奏せず、百計盡くる時に方り、能く病者の心を助けて、氣力を強からしむるは、獨り此崇神敬佛の一事あるのみと答へしかば、聞く者其心を盡すの深きに感じけり、其後善四郎は、父母に乞ふて、東京芝三田なる慶應義塾に入り、修業中も、折々父母に勸めて、保養の爲め出京せしめ、自分諸所を案内して見物せしむる忝務めて、父母の心を安穩にし、能く敬ひ養ふこと少しも怠らざりしか、廿二年の頃より、母亦病に犯されしが、地方には良醫あらざればとて、強て兩親に請ひ、相伴ひて上京し、岩佐病院の隣

地に寓して、朝には學校に出て、夕には父母の枕邊に侍して、帶を解かぬ夜もありしにぞ、人其至孝に感せざるものなかりしと、廿三年の秋に至り、母の病少しく怠りて歸郷せしかば、善四郎は三十里の道程を歸省すること、一ヶ月間五回に及べりといふ、されば其志操篤行公邊に聞え、本年四月廿七日縣知事より左の如き感狀を賜たりとぞ、

群馬縣上野國南勢多郡北楠村大字下築田

今井善四郎

平素行狀端正、幼より善く父母に事へ、母重病に罹り岩佐病院に入院するに當り、修學の餘暇、病床に臨み之れが看護を怠らず、終始一日の如く、茲に數年志操を變せざる段、洵に奇特に候事、

明治廿四年四月廿七日

群馬縣知事從四位勳三等中村元雄

(問詞) 一善四郎氏は、十才の時何處の學校に寄宿せしや、

(二) 其學校は何里距るや、

- 三) 氏の父は、何故に教師を家に招きしや、
- 四) 氏の藍園翁の門に在る時、翁は何といふ和歌を贈りしや、
- 五) 其和歌の意味は如何、
- 六) 氏は父の病氣の時、如何に看護せしや、
- 七) 氏が病氣平癒を神佛に祈りたる理由如何、
- 八) 母の病氣の時看護せし有様如何、
- 九) 何故に中村群馬縣知事は氏に感状を賜りしや、
- 十) 諸子は此善四郎氏を龜鑑として、兩親を孝養することを得るや、

第三十六章

題目 孝子は天の恵を受く、

例話 英國音樂師の幼兒パアーレーの話

目的

人其父母を愛せざるものなし、故に孝子の行事を聞ては、同感の情自然に起り、之を助く者亦の下に流るゝが如く、不幸の子を惡むことには、其正反對にて天下之を容るゝ者なしと識す、

英國倫敦にミセス、ブルーマンと呼ぶ婦人の音樂師匠あり、早く良人に別れ一子パアーレーを教育するに、他に收入ある財産もなければ、唯音樂教授の束脩月謝によりて、僅に活計を營みたり。パアーレー漸く五歳の時、母病に罹り、臥床に伏して起つ能はず、不幸に不幸を重ね、艱難に艱難を極めて、今は母に藥石を薦むる能はず、食ふに食物なきに至りて、母は日々悲聲を發して病床に倚り居るのみ、時に一封の郵書を投じ去るものあり、パアーレー其書を開き見るに、ミス、ウヰルントン會主にて音樂夜會よりの招待狀なり、パアーレーは暫時靜默して思考せし後、一の唱歌を作り、母に告げ、ミス、ウヰルントンの家を尋ね行き、面會して曰く、兒は病母の藥を求め、且つ一片の麵包を購はん爲め、御身を訪ひしなり、今夕よりの夜會、御身が會主なりとのことなれば、願くは兒が自作の唱歌を吟じ、兒が爲めに募金せられんことをとて、巻物を出して示しければ、ウヰルントン婦人、之を開き見るに、其句節樂譜に合ひ見

事の作なれば、大に感じ、直ちに一枚の傍聴券を與へたり、パアーレー大に喜び、深く謝して、立ち去らんとしては躊躇せり、婦人は何事ならんと問ふに、パアーレー曰く、兒は病母一人を遺して夜中會場に趣く能はずと、婦人其孝心の厚さに感じて、今夜下婢を汝の家に遣して、汝に代らしめんと、且金五十錢を與へたれば、パアーレーは非常の喜色を顯して家に歸り、此夜定刻に到りて會場に趣き、ミス、ウ井ルントの傍に坐したり、既に會員も満ちたるとき、ウ井ルント起ちて、パアーレーの歌を吟せしに、其音調甚だ悲哀にして、孝情溢れ、聽者をして覺えず落涙せしめたり、ウ井ルント吟じ終り、尙語を次て曰く、此歌の作者は、今我が傍に在る小兒なり、母病氣に罹りて、藥を求むるに資なく、又糊口の術なく、其資を得んが爲め、情に迫りて遂に此作あり、乞ふ幾分の義捐あれと言ひ終るや、貴紳の棄捨金三百ポンドを得たり、此時新聞社員は唱歌の原稿を購はんと乞ひ、且つ曰く、此書出版して第一版は其賣揚金を悉く作者に酬ひんと、ウ井ルント之を聞き、大に喜び諾したり、其翌日

ウ井ルントはパアーレーの家を訪ひ、病婦の傍に伏し語て曰く、其許は實に幸福なり、天其許の正實を恤み、此兒をして助けしむと涙を流して、病婦を慰め、孝子を勞りたれば、病婦之を聞き、共に與に涙を流し、遂に安眠するが如く永く逝かれたり、此事諸新聞にあらはれ、パアーレーの名譽廣く世に知られたり、實にパアーレーの如きは、眞の孝子として敬稱すべき人なり、

(問詞) パアーレーの母の名は如何、

- (一) 母は何業をなせしや、
- (二) 其活計向きは如何、
- (三) 母の病氣に罹りし時の有様如何、
- (四) パアーレーはウ井ルント婦人に何を依頼せしや、
- (五) ウ井ルント婦人は如何にせしや、
- (六) 音樂場の有様如何、
- (七) パアーレーの作歌を聞きし人々は如何、
- (八)

- (九) パーリーは義捐金何程を得しや、
- (十) 新聞記者は如何にせしや、
- (十一) 其後母は如何せしや、
- (十二) パーリーの評判如何、

第三十七章

題目 國の本は家に在り、家の本は身に在り、

例話 木葉長平治家内の話、

目的

其身指利慾の念を挾まざる時は一家和睦して、同心協力の美風を養成するを得べし、之を以て社會に推し及さん此美風豈に行はれざるの理あらんや、方今の事業皆廣大ならざるなく、必ず社會若くは組合の組織を待て、然る後に能く爲すあるべし、然れども社會組合の瓦解士崩比々皆是なり、何ぞ家を治むるの法を以て會社組合を維持せざるや家を治むるの法は利慾の念を斷つに在りと論す、

熊本縣天草郡高戸村の民木葉長平治は、生得溫柔敦厚にして、一家五十四人、其他乳母奴婢等數多ありと雖も、家内睦しく、互に力を共にし心を戮せて、家業を勉勵し、老若男女其分に從ひ、各課を定めて其事に從ふ、老長は培殖の事

に注意し、少壯は耕耘の業に盡力し、聊も長老の命令に違背せず、互に廉耻を守りて平生を謹慎し、若し内外によらず、重大の事件ある時は、衆議の上、決を戸主長平治に採り、又親戚中に窮乏者あれば、手を盡して救恤す、故に遠近皆稱譽して賞聲聞えざる所なし、蓋し父祖より數世此家法を守りて、出精したれば、豪富といふには非ざるも、萬事に不足を感せず、安然と日月を送れり、故に祖父より當代の長平治に至るまで、舊藩主より賞典を賜はること數回、明治政府に至りても、亦厚く其一家の美德を賞せられしといふ、

(問詞) 一長平治一家の治法如何、

- (二) 長老は如何、
- (三) 少壯者は如何
- (四) 大事ある時は如何、
- (五) 何故に長平治の祖父より、屢賞典に預りしや、
- (六) 一國は何より組織さるゝや、

- (七) 會社組合を維持するの標準は何なりや、
- (八) 然らば一家を治めんとするものは、先づ如何すべきや、

第三十八章

題目 兄弟は同根より出でたる數幹の如く、其本幹は兄也、

例話 岩佐岩吉兄弟の話、

目的

我國法は家産を擧げて總領の男子に授くるを以て本則とし、分地分家するは長男の承諾を得るを要する者なれば分家分地を得たる者は其兄の慈惠を感佩し之に報する以所を思ふべしと論す、

岩佐岩吉は、阿波國那賀郡下福井村の者にして、安政六年兄唯吉より田畑の分與を得て別家し、農業の傍ら絞油を業とし、尙荒物類を賣りて世を渡りけるが生質篤實にして日夜勉勵せしかば、家産月日に増殖して、豊なる活計を營むに至りたり、岩吉思へらく「是れ全く兄唯吉の恩義に由る處なり」とて、先きに分與せられし田畑を、本家に返さんことを懇ろに申入れしに、唯吉答ていへらく「一旦弟に遣し、其家祿となりしを、何とて取るべきや」とて承引せず、

再三辭退に及びたりしかど、岩吉は「是れ根本を培養し基礎を堅固にする爲めたれば」と、強いて兄の承知を求め、兄の家祿と爲せしといふ、世間多くは牆に鬨きても、己の分を多く得んと欲する者なきにあらず、然るに此兄弟の如きは、互に利を譲り、以て其親愛を盡すの誠心、實に世俗の鑑となすべきなり、

(問詞) (一) 岩吉は、兄より何を分與されしや、

(二) 其後岩吉の家産は、如何になり行きしや、

(三) 岩吉は兄に何と申入れしや、

(四) 兄は何といひしや、

(五) 岩吉は兄に何といひて、承引を受けしや、

(六) 此岩吉の心意は如何に感せらるゝや、

(七) 兄は如何なるものと思ふや、

(八) 諸子は兄弟間は、如何にせんと思ふや、

第三十九章

題目 兄弟に事ふるには父母の如く、又主君の如くすへし、
例話 農夫長右衛門の話

目的

古來我日本國の法は、其家産を以て悉く長男若くは長女に與ふ之を總領といふ、故に弟妹若くは其子孫にして困窮者あれば、其兄弟若くは其子孫之を扶助すへき義務あり故に兄弟は父母の如く、又主君の如き者也と諭す。

昔阿波國板野郡齊田村の農夫に、長右衛門といへる者あり、兄は佐兵衛とて、愚鈍にして渡世の業も立ち難かりければ、弟長右衛門は鹽の中買に出精し、其利益は少しも己が所有となさず、皆兄に渡し、日毎の用度は、都て其度毎に兄より請ひ受け、別に己が才覺をもて人より鹽濱を借り、製鹽の器械まで調ひ、兄及び其妻子をも呼び迎へたり、親族等も之を見て、不慙に思ひ、家族多くならんには、行くく住み詫びぬ可しなどいひしを、長右衛門は、若し商業の失敗もあらば、其身は人の奴僕となりても、兄をば安慰せしめ度きところ、年來の願ひなれとて、聞き入れず、自己夫婦は、雇人の狀をもて業を勵みしかば、

終に彼の鹽濱をも買取り、家をも新に建て、兄の家族を住ましめたり、此時長右衛門は、年既に五十を超え、妻と子供等合せて五人有りけるが、いふせき家を作りて住み、最初の如く兄の奴僕に等しく、鹽濱の働きをなし、家計のことは、兄の夫婦に托し、萬事心に逆はず、いと睦しく暮しける、斯て兄の女子二人とも、追々成長しければ、長右衛門は、それく良縁を求めて婚嫁せしめたり、兄は又さる云ひ甲斐なき者なれば、心に叶はぬ事も多けれども、斯る氣色をば顔にも出さず、只管ら父母の如くに敬ひ事へけり、且つ世間の交際も行き届き、貧者には兄に代りて情を加へ、己は日々の用を節して、善事とだにいへば、費用多きことをも厭はず、夫婦とも信實に行ひしかば、享保八年二月領主より褒美として帶刀を許され、且つ宅地の貢租を除き、外に妻子にも賞錢を賜りしといふ、

(問詞) (一) 長右衛門の兄は、如何なる者なりしや、

(二) 長右衛門は何といひて兄を引取りしや、

- (三) 長右衛門夫婦は、如何に兄夫婦に事へしや、
- (四) 長右衛門は、兄の女子を如何せしや、
- (五) 長右衛門の兄は、誰の爲め安穩に世を送ることを得しや、
- (六) 長右衛門なき時は、兄は如何なるべきや、
- (七) 長右衛門は何故に帯力を許されしや、
- (八) 其妻子は如何、
- (九) 長右衛門は如何なる人といはるゝや、
- (十) 諸子は兄弟に對して、如何にせんとせらるゝや、
- (十一) 兄弟をば、何故に父母又は主君の如くせざる可らざるや、

第四十章

題目 善を責むるは朋友の道なり、

例話 宋の伸顔と候無可の話、

目的

人の名譽を保つことを得るは、常に己の過を知りて之を改むればなり、是れ必ず朋友の補助を須たざる可らず、故に朋友間は互に腹心を開き、忠告善道を旨とし、嫌疑の心を抱く可からず、と諒す。

支那宋の伸顔といへる人は、候無可を友とし、切磋琢磨、常に水魚の交りを爲せり、曾て人に語て曰く「吾れ一日も候無可を見ざる可らず」と、人其故を問ふ、答て曰く「無可能く人の過ちを攻む、故に一日見ざれば、吾が過ちを聞かずして、修徳の却歩を來たすと、共に清貧にして僅に一時衣あるのみ、出づる事あれば、必ず相更へて服せしといふ、

往古人々の朋友と交際する斯くの如し、今人や、もすれば、朝に同死の約をなし、夕に仇敵の疎信を存す、是れ其交り一時の利益を目的とし、眞に切磋琢磨の實益を得んとするに非ざれば也、甚だ嘆すべきの至りならずや、諸子其れ能く鑑みよ、

- (問詞)
- (一) 伸顔は候無可と、如何なる交際をなせしや、
 - (二) 伸顔は常に人に何と語られしや、
 - (三) 其理由は如何、

- (四)己の過を知らずして打捨て置かば如何、
- (五)人々過あるを忠告されし時は、心に快きや、
- (六)私の忿を避けずして、能く忠告する者は如何なる人なりや、

第四十一章

題目 眞友は吾身の爲め一の寶庫なり、

例話 唐の狄仁傑の話、

目的

友人は最も重し最も親みて苦樂喜憂相共にし相分つべきものなりと諒す、

支那唐の世に狄仁傑といへる人、朝に仕へて、法曹參軍といふ官になりしが、友人に鄭崇質といふ者あり、或時遠方に使すべき命を蒙りければ、仁傑は崇質に向ひいひける様、足下の老母は、病に臥せるに、今足下遠く去らば、看護の人なく、老母の悲愁一方ならざるべし、予之を視るに忍びざれば、足下に代りて此命を奉せん」とて、崇質に強いて肯はしめ、書を上りて其命を請ひ、崇質に

代りて遠地に赴きしといふ、

世に頼むべき者は朋友にして、一身上の關係より、身の出世等に至るまで、多く興りて益する者なり、故に朋友は最も重し最も親しみ、苦樂喜憂、相共にし、相分たざるべからず、

(問詞) (一) 狄仁傑の友人に何といふ人ありしや、

(二) 鄭崇質は如何なる命を受けしや、

(三) 其時崇質の家には、如何なるとありしや、

(四) 仁傑は、崇質の母の病あるを見て、如何せしや、

(五) 其時崇質と母の心は如何でありしや、

(六) 仁傑は何故遠方に使せしや、

(七) 然り朋友は皆斯の如きことを望む、諸子は若し友人に用事あるも差間成すと能はざるを見れば如何するや、

(八) 諸子は友人間は、如何せんと心得居るや、

- (九)友人は、吾が爲め如何なる利益あるや、
- (十)然らば、吾れ亦友人に利益を與ふべきや如何、

第四十二章

題目 善行は衣裳を飾るに勝る、

例話 佛國の少女マリーの話、

目的

好き衣裳を着たる人は、誰れにも一寸尊敬さるゝ者なれども、其心善良ならざる時は、久して衆人に排斥さるゝなり、衣裳は悲しくも、其心善良なる時は、久しきを經るに隨ひ、益々衆人の尊敬を受くべしと諭す、

佛國の或地に、大なる葡萄園ありて、此園の番をなすマリーといふ少女ありしが、十五歳ばかりの頃、郷社の祭日に近きぬれば、其日着用すべき衣裳を求めんとて、平生辛勞して貯蓄せし金を懐にし、心中大に喜びつゝ、急ぎ、グスールの街を通り過ぎんとせしに、路傍に一人の老夫、踞りて泣き叫び、いと困弊せし有様なるを見留めしかば、立留まりて其由を聽き、心に深く之を憫み、貰ひ泣きに泣き伏せしが、頓て衣裳を購ひ我身を飾るの念を斷ち、其金を出し

て老夫に與へ、窃に思ふ様、善行をなしたるは、美しき衣裳を着用するよりも勝りたりとて、喜び勇みて家に歸りしとぞ、

(問詞) (一)マリーは、衣裳を買はんとして如何せしや、

(二)何故にマリーは、衣裳を買はざりしや、

(三)何故に善行は、衣裳を飾るに勝るや、

第四十三章

題目 無益の争ひは、負くるを以て勝ちとす、

例話 矢野毅卿の話、

目的

争論して勝を得んとするは誤なり、争論の勝敗は、他人判決するに非ざれば、底止する所なきものなれば、無駄なる骨折せず、負くるは勝つとの諺を服膺し、無益の争論をなすべからずと諭す、

或人の歌に、いさかいは、實に山彦の樹魂かや、我口ゆゑに、先もやかましとある如く、争ひは争ふ程關係も廣くなりて、遂には止め難きにも到るものなれば、無益の争論は、決して爲す可き事にあらず、斯る争論に勝ちを得しとて、名

譽にもあらず、又負けしとて耻辱にもならずして、却て負くるこそ勝ちと
 すべきなり、故に諺にも「負くるは勝ち」といへり、矢野毅卿は杵築藩の家老に
 して、學才衆に秀で、品行方正なる人なりしが、或時衆人中にて、傍の一人口を
 極めて、毅卿を罵りけるに、毅卿は少しも怒れる色なく、靜かに其人にむかひ
 「某といへども過ちなきこと能はず、若し斯る事あれば、諫め正されんことこ
 そ希ふところなれ、妄に怒り罵らるゝこと、殊に聞きぐるしきことなり」とて、
 少しも争はざりしかば、其人も氣沮み面目を失ひし有様なりしが、是より後、
 毅卿を見る毎に、厚く禮して交りけるとぞ、
 世には、かりそめの争論よりして、互に其感情を傷け、其怨み終身の交際に纏
 縁し、相敵視し以て此の世を終はるものあり、よく注意すべきことなり、

- (一) 無益の争論とは如何なることなりや、
 (二) 或人の歌は何といふや、
 (三) 矢野毅卿は如何なる人なりや、

- (四) 或時衆人中にて如何なることありしや、
 (五) 毅卿は其時何といひしや、
 (六) 其後其人は如何せしや、
 (七) 然らば諸子は人と争論せざるや、

第四十四章

題目 汝他人を恤まば、人も亦汝を恤まん、

例話 岡商會の老母と永倉某の話、

目的

盛衰は世の常にして、殊に商人は其轉計られざる者なれば、不幸者を見ては、他人の身の
 上を傲さず、自身に比較して、爲し能ふ丈けの救恤を施與すべしと諭す、

盛衰興敗は世の常にして、水の流れと人の行末こそ、定め難けれ、されば盛な
 りとて驕るに足らず、衰へたりとて亦哀しむに足らざるなり、己れ盛なる時
 に當りて、衰へたる者を恤み、以て其喜ぶ有様を見る程、世に満足なるものは
 あらざるなり、之を我身に比較し、其衰者の位置に在りと假定せよ、其恩生涯

忘れんとして忘る能はざるものにぞあるなり、
 東京深川黒江町に、先年岡商會とて、手代番頭數多召使ひ、花の嵐の外に、世に
 憂きことを知らぬ、富裕なる商店あり、主人は生質慈愛深くして、召使ひの者
 共に憐みを添へて、使ひける程に、一家和睦靜穩にして、近隣出入先きの評判
 好く、家業大に繁昌せしが、滿つれば虧くる世の習ひにや、一時の手違ひより、
 家運漸く傾き、諸事失敗打ち續き、頓て家藏までも他人に渡し、俄に變る有様
 に、主人は他人に顔見らるゝも辛しとて、妻子眷族離散して、各行衛知れず
 なりし、跡には六十餘歳の老母一人、僅かの縁故を求め、深川公園の一隅に、幽
 なる家を借り、細き烟も立て兼ねて、いと昔を忍ばれて、袖に涙の絶ゆる暇
 もなく、惜しからぬ命をなからへ居たりしが、先年岡家繁昌の時、雇人たりし
 下谷金杉の永倉某なるもの、此事を聞き及び、昔日の恩儀に報いん爲めとて、
 老母の住居を訪ひ慰め、屢物品又は小遣錢等を贈りければ、老母の喜び一方
 ならず、遇ふ人毎に、其奇特を物語り、嬉し涙に暮れ居るとぞ、

第四十五章

題目 怨に報ゆるに徳を以てす、

例話 米國の農夫と土人との話、

目的

我に妨碍を加へ不親切を爲す者ありと雖も、我よりは深切を以て之を遇すれば、遂には我
 が深切に感伏するなりと諭す、

亞米利加の或農家に、一夕土人の大に疲勞したるが、來て食を乞ひしも、無し
 とて與へざりしに、土人更に水を乞ひければ、農夫大に怒り、早く去れ此狗輩、
 汝等に與ふべき物一もなしと罵りければ、土人は立ちて暫く農夫の面を熟

(問詞) (一) 岡商會の盛時は如何、

(二) 岡商會の衰況は如何、

(三) 老母は如何にせしや、

(四) 永倉某は如何なる人なりや

(五) 永倉某は老母に對して如何にせしや、

視して去りしが、此農夫、其後獵に出で、深く山中に入りて、道を失ひ歸ることを得ず、困却し居たりける時、遙に燈火を見受けしかば、大に喜び、其處に到り見れば、土人の住家なり、農夫路を問ふに、主人と覺しき土人出で來りて曰く、「御尋の地までは、路甚だ遠く、日も亦暮れたれば、我家至て矮陋なれども、若し意あらば、一夜の露を凌ぎて、明朝歸路に就き賜ふべし」と、農夫大に喜び、其深切を謝して終に宿りしに、主人肉を焼き酒を侷め、皮衣を鋪きて眠に就かしめ、最も懇ろに世話したり、明くれば、主人農夫を導き、自ら農夫の獵銃を荷ひ、種々慰めて行くこと二三里にして、農夫に向ひいへらく、「是より路は最と平らにして、行程も亦僅なれば、茲にて別れを告げん」と、路傍の樹根に腰打ち掛けつゝ、農夫に問ふて曰く、「君我が顔を識るや否や」と、農夫曰く、「何れにてか見掛け申せしことあり」と、土人又曰く、「定めし然らん、我は嚮きに君の家に食を乞ひ水を求めて、君の御叱りを蒙りし土人なるが、今別れに臨み、敢て一言申上ぐれば、今より後再び憐みを求むる者あらば、快く應じ遣さるべし、必ず罵

言の語を爲し、不慈の行ひを爲し、賜ふ勿れ」と、農夫大に耻ぢ感激して去りしといふ、

米人の野蠻人種となす、インヂアン人にて尙人を救ふの親切あり、開明に誇る人種禮讓を以て他人と交際せざるからべす、

(問詞) (一) 土人の來りて食を求め水を乞ふたるとき、農夫は如何せしや、

(二) 土人は如何せしや、

(三) 其後農夫は何處にて路に迷ひしや、

(四) 農夫は其時如何せしや、

(五) 其家の主人は何といひしや、

(六) 土人は如何響應せしや、

(七) 其翌日は如何、

(八) 別れんとして、土人は農夫に何といひしや、

(九) 土人は農夫に何と諫めしや、

(十) 農夫は如何せしや、

第四十六章

題目 君子は畜産を以て人を害せず、

例話 秦の穆公の話、

目的

人は貴く畜産は賤きことば、理の見易き所なれども、愛惜の私心甚しければ、此理を顛倒するもの尠からず、たゞ人の命を害せざるも、畜産の爲に父子兄弟朋友の道を失ふは、皆君子の取らざる所なりと論す、

支那秦の穆公、或時岐山といふ地にて、其の愛馬を失ひしが、土人集りて其馬を捕ひ、屠りて其肉を食ひたり、吏人等土人を捕縛して刑に處せんとせしを、穆公之を聞き許さずして曰く「君子は畜産の爲めに人命を害はず、吾聞く馬を食ふて酒を飲まざれば、身を傷ふ」とて酒を與へて土人に飲ましめ、後來を戒めて放免せり、其後秦、晋國と不和を生じ、戦を開きしに、秦軍敗れて、穆公既に危かりし時、先きに赦せし土人三百人、先きを争ふて敵陣を衝きしかば、一旦敗北せる軍勢を振起し、再度晋軍と戦ひ、晋軍を大に打ち破りて、晋侯を

擒にして歸りたり、穆公は其民の罪を赦せしのみならず、其身を傷ふを憐みて、酒を賜ふ、其仁徳此の如くなりしかば、遂に支那の西北部を一統して之に覇たることを得たり、

(問詞) (一) 穆公は岐山にて如何なることありしや、

(二) 吏人は何故に土人を刑に處せんとせしや、

(三) 穆公は如何せしや、

(四) 秦晋戦争の時秦軍は如何せしや、

(五) 穆公の身は如何なりしや、

(六) 穆公は如何にして難を免れしや、

(七) 何故に岐山の人は、身命を捨て、穆公を助けしや、

(八) 諸子は他人を愛するに如何にするや、

第四十七章

題目 徳の流行する、置郵して命を傳ふるより速なり、

例話 水谷亥孝太の話

目的

紛々擾々として、私黨を立て、私論を張る最中に當りて、有徳者一逼の説諭を加ふれば、忽ち鎮定し、後難あることなし、若し兵力又は計略を用ひて鎮壓すれば、一時暫伏するも、心腹せざる故に、始終安寧ならず、故に有徳者は國家の柱石なりと論す。

水谷亥孝太は岡山縣の人なり、性質廉直にして、勤王の志厚く、家に在りては父母に孝養を盡し、家族を慈愛せり、曩きに廢藩置縣の際、頑民集合し、聖意の在る處を知らず、妄に私論を主張し、動もすれば官吏に抗し、暴舉を爲さんとせり、此時に當り、官水谷氏を抜きて戸長となし之をして、朝意を説諭せしむ、元と水谷氏の人望厚きを以て、民皆其説に服し、村民の風習忽ち一變し、謹て朝意を遵奉し、四郷始めて安寧に趣きぬ、是より水谷氏専ら力を教育に盡し、以て頑民を教導せんとし、二十餘ヶ所に小學校を設け、戸に就き入學を勤めしかば、幾許ならずして、生徒千を以て數ふるに到れり、左れば郷内智識の普及すると共に、先きに朝意に戻りしことを知り、居民侃々として朝意を遵奉

して、少しも犯すものなきに至れり、是れ水谷氏の、王に勤め、朝意を遵奉し、臣民たるの職務を全ふし、以て其儀範を示せしに依るといふべし、

(問詞) 一 水谷亥孝太は、如何なる人なりや、

(二) 頑民は如何なることを爲さんとせしや、

(三) 頑民を静めしは誰の力なりや、

(四) 其後水谷氏は如何せしや、

(五) 水谷氏の如きは、如何なる人といはるゝや、

第四十八章

題目 中に誠あれば、外に形はる、

例話 普王フレデリックと兵士の話

目的

内心常に誠意を以て満たすときは、事に觸れ機に迫み發動して言行に現はるゝものにして、一時を繕ひする言語と雖も其貴きこと金玉の如し、是れ平生養ふ所あるに因るなりと論す。

普魯士王フレデリックの近衛隊に、一人の兵士あり、品行端正にして忠勤衆に擢

んずるを以て、王の御覺えも殊なりける、此兵士堅美なる鎖に、砲丸を附けて、常に胸間に垂れたりければ、人々皆懷中時計と想ひたり、然るにフレデリック王、如何にして知り玉ひけん、其砲丸なるを知し召し、其意を試みんとて、或時兵士を御前近く招き玉ひ、故らに知らざる面地して曰く、汝は、兵士に不相應なる善き時計を所持するものかな、今は何時にてあるぞやと問はせらる、兵士、陛下よ、是れは時間を示す爲め、持てる器にあらずして、君に盡す真心を示す爲めなりと申しければ、王深く感動せられ、知らず識らず兵士の傍に進み寄り、懇に握手を施し、種々の賜物等あり、其後も特に恩使せられしとぞ、此兵士は時計を所持せざる故、砲丸を附着せしなれども王の問ひ玉ふに及び平生の心掛とする所を表示して答奉りしは、天晴の忠臣なり、斯くの如き人々を以て、其國の軍隊を組織してこそ以て各國と對等の交際するを得べけれ、諸子其れ務むべきなり、

(問詞) (一) 普魯士王フレデリックの近衛隊の一兵士は、何を胸に掛けしや、

- (二) 人々は見て何と思へしや、
- (三) 王は如何せしや、
- (四) 兵士は王に何と申せしや、
- (五) 砲丸を胸に掛くるは何の爲なりや、
- (六) 何故に王は此兵士を厚遇し玉ひしや、
- (七) 斯様なる人々兵士となりて、一國を守るときは如何、

第四十九章

題目 一家仁なれば、一國仁に興る、

例話 和田與右衛門の話、

目的

邦國は人民各個の合併せる總名なれば、所謂文明國とは他なし、其人民各自に、品行正しく職業を務むる者集合したる者也、就中一郷里の名望家は、其他人を感化する力ある者なれば、國家文明の要素たるを期すべしと論ず、

相模國足柄上郡駒形新宿に、和田與右衛門といへる人あり、性質朴篤にして、家計富有なり、與右衛門は老年にして、維新の大御世に會へるを、千載の一遇

と勇み喜び、衆に先んじて家風を改革し、從來農家にて祀り來れる、庚申、甲子、月待、日待等の祭祀をば悉く廢し、其費を省き、新に日新講といふが如き講社を結び、講日には博識の人を招き、村内の男女を集め、維新王政の恩澤、及び文明開化の説を教諭し、又窮民の爲めには、許多の金穀を貸與して其償を索めず、専ら自他の品行に注意し、勉業勤藝の道を諭せしかば、全村一家の如く、能く治まりて、與右衛門に仰ぎ事ふること、恰も慈父母に事ふることく、衆人皆懷きて慕ひあへりどぞ、

- (問詞) (一) 與右衛門は如何なる人なりや、
- (二) 與右衛門は如何に家事を改革せしや、
- (三) 日新講の當日は如何せしや、
- (四) 其他の善行は如何、
- (五) 何故に駒形新宿は一家の如く治まりしや、
- (六) 之れを大にすれば如何、

- (七) 一國文明の要素は、孰れにありや、
- (八) 然らば諸子は、如何にして一國の文明を進歩せしめんとするや、

第五十章

題目 人は其、身位の尊卑を問はず、己の國を裨益すること
を忘るべからず、

例話 高島嘉右衛門氏の話、

目的

國を愛するの心は尊卑によりて輕重あるものに非ずと説き、各自務めて國益を計るべしと論ず、

高島嘉右衛門氏は、幼時にして既に頗る義侠才幹あり、成長するに及んで、武藏の横濱港に赴き、一小舗を設け、高島屋と稱へて商業を營みしが、機を得て洋館建築の請負をなし、初めて七萬餘圓の利益を得たり、其後明治三年政府東京横濱間に、鐵道を布設するに及び、令して曰く、神奈川横濱の間、海面幅六

十間を埋立するものあらば、鐵道布設の線路、五間乃至十間を除くの外、之を與ふ」と、嘉右衛門氏請願して埋立をなし、其地を高島町と名け、悉く官に收む。政府之を賞して金拾萬圓を下し賜る。此に至て氏の名聲一世に轟けり。明治四年企を起して瓦斯燈を横濱港内に點す。天皇陛下尾上町の邸に臨幸あらせらる。其榮譽實に無邊と謂ふべし。

勸善訓蒙に、人は其身位の尊卑を問はず、已れの國を裨益することを忌む可らず」と、高島氏の如きは、此の語を實踐せし者と謂ふべし。

問詞(一) 高島氏は如何なる人なりや、

- (二) 高島氏は何によりて利益を得しや、
- (三) 政府鐵道布設につき令せし時、氏は如何せしや、
- (四) 高島氏は其埋立たる地面を如何せしや、
- (五) 横濱港に瓦斯燈を設けしは、誰の力なりや、
- (六) 何故に 天皇陛下は、氏が尾上町の邸に臨幸されしや、

- (七) 高島氏は國の爲め如何なる利益を計りしや、
- (八) 農工商各、其國益を計らんには、如何してよきや、

家庭教育
修身叢談終

明治二十七年二月廿五日訂正印刷
同 二十七年三月八日再版發行

版權所有

編纂者
編纂者
發行者
印刷者
發兌所

埼玉縣北足立郡木崎村大字本太八十
六番地

石井 了一

全縣全郡浦和町三百三十八番地

石井 福太郎

東京市京橋區南傳馬町二丁目五番地

目黒 甚七

全市全區弓町廿四番地三協合資會社

橘 磯吉

新潟縣古志郡長岡表四ノ町

目黒 十郎

東京市京橋區南傳馬町二丁目五番地
全支店



